
暇な世界にさようなら

歯ぐき血まみれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暇な世界にさようなら

【Nコード】

N7753Y

【作者名】

歯ぐき血まみれ

【あらすじ】

あー、最近することないよなー学校行っても授業とかまじつまんねえし。この世界は暇すぎる。ゆいいつの楽しみといえは家でやるオンラインネットゲームくらいだよまったく。はあ、いっそのこと別の世界に神様が送り出してくれないかなあ。若干キャラがチート性能だったりするのでチート性能とかまじありえないわーとか思う人には向いてないかもです。作者はまだ未熟者ですので誤字脱字や変な点などがありましたら指摘してくれると嬉しいです。

オレの日常（前書き）

最初はらへんは主人公の日常回

オレの日常

「あーさむい。なんかなんねーかなマジで？」

隣でオレの友人がそんなことをいう

「なんとかできたらしてるって・・・」

実際なんとかしてほしいよなこの寒さ

いま携帯の天気予報的には5 らしい

コイツがさむがるのも無理はない。

「そーいやさーもうすぐテストだよなマジで」

そーいやそんなこともあつたな

まあ知ったところで勉強なんかするわけがないが

「俺全っ然勉強してないからこんどやべーかも的な？」

へえ、こいつ意外に勉強するタイプなのか。

こいつは守山達也 オレこと凜道 蛭の同級生。去年高校に入学した時に前の席にいたのがコイツだ。

その時からコイツとはつるんでるからもう1年くらいの付き合いになるのか

「じゃー早く帰って勉強したほうがいいんじゃないのか？」

とりあえずテストが近いならオレとだったらしゃべってる時間なんてないはずだし

そう思ってオレはそう提案する。

「そうだなあー、んじゃ帰るわ。また明日なー」

よし、オレも早く家に帰って暖房の聞いた暖かい部屋でネットゲでもするか。

そついいながら特に急ぐまでもなくだらだらと家に帰る虫であった。

「さむっ」

自分の家についてまず最初に口から洩れた言葉がそんなものだった。

いやだつて4 だよ？外より寒いっておかしくね？

オレは制服を適当にハンガーにかけて暖房を入れつつPCの電源を入れる。

ちなみにここはもうわかってると思うがオレの家である。

母親は毎日深夜に帰ってくるか仕事が遅過ぎて仕事場で寝泊まりするしあんま家にいないのが現状だ

親父はいない。事情はしらん。

まあそこらへんは母さんが話してくれる時をまとうとは思っ

別に知りたいわけでもないしな

そんなことを考えてる間に室温もそこそこあがって暖かくなってきている。

さて、と。

そろそろINするか。

そう思いつつオレはインターネットをつけてオレがはまっているネットゲームーセカンドワールドを起動する。

スタート画面。

そして始まりの街

このセカンドワールドは3Dのアクション系だ。

いろいろな職業があり、レベルアップによってもらえるポイントをいろんなステータスにふって自分専用のキャラクターをつくれる。

ちなみにオレのキャラ名はホタリンである。

昔言われてたあだ名を使ってみた。

もっとマシな名前にしてよって？

ほっとけ

さーていつものメンバーはいないかなあ

そう思い街をぶらぶら歩いてたら後ろから人影が近ずいてくる

「やあ」

そして挨拶の声。

振り向く。

白いニット帽 服も同じく白系で統一されたディスプレイズ そして金髪

間違いない

「よう、マカロニさん。他のみんなは？」

この友だちの名前はマカロニ

日常的に狩りや素材集めを共にする信用できる仲間である。(キリッ

それにマカロニさんの物理範囲攻撃ははんぱない。

ザコモンスターの軍隊なら一撃で壊滅させられる

一部では一騎当千のマカロニとかいわれてるらしい

「まだ着てないみたいだね」

さわやかな笑顔でそう返事される

「んじゃ適当にクエストボードでもみとこっぜ」

「そうだね」

そんな会話をしていたら

「もおあんたたち着てたの？早いわね」

そんな声が聞こえてくる。

ちらっ

全身黒い龍騎士が着るような鎧に身をつつみ、頭にはティアラのよ
うなものをのせている。

そして金髪のポニーテル

「なんだコロネか」

「なんだって何よ!」

ちなみにこいつが着てる装備 集めるの大変だったなあ

ていつかわざわざ装備を確認なんかしなくても声でわかるんだけどね

こいつはコロネ。

コロネもオレのギルドメンバーの一人で職業はアサシン。相手の急所を突いて即死させたり相手から素材を盗んだりするのが主な戦闘スタイルだ。

てゆうか、普通に強い。

「んで、あんたたちなりにしてたのよ」

「ああ、暇だから何か適当にクエストでもいこうかになってね」

「なるほどね」

2人が会話してる間オレはクエストボードに注目していた。

このクエストボードといわれる板からは様々なクエストを受けることができる。

まあようはどこにいくか決めるところみたいなの？

「うーん、素材集めはめんどくさいから討伐系にしてくんね？」

「そうだねえ・・・おっと」

マカロニさんが何かにきずいたようだ。

オレもマカロニさんが見ている方向をみる。

そこにはよく知ったヤツラがいた

「お、アルスとリサじゃん」

「そうみたいだね」

「お、こんにちわー。ちょうどいまどこいこうか迷ってたところだったんだぜ」

「よー」

「……………」

元気な挨拶を返してくれたのはリサ

なにかと綺麗な聖騎士装備に身をつつみ、背中には長くも短くもな
い剣を二本収納している

本人いわくかなりのレアアイテムでちよーかるいよ！とのこと

みずいろの髪をツインテールに結んであり、かなり幼く見える

そして何もいわず腕を振ってあいさつしたのがアルス。

いわずもかな超無口である。

だがしかし彼の防御力は理解不能なレベルまで達している。

全身西洋の鎧を装備しており、外見からどんな人間なのかあまりわ
からない

っていうか全く分からない

頭装備も鎧なので顔もわからないという謎極まりないヤツだ

一部の間ではびくともしない絶対的な防御力から世界の境界線
―スライン とか呼ばれてるらしい

なんとも大層な二つ名だが大袈裟な表現にはならないところがまた
すごい

ってか怖いよ

さて、これでそろったなギルドメンバー

「ところでどっかいきたいところ……」

「ねえ知ってる？」

オレが言い終わる前にリサが乱入

「この前突然北の森の奥地に空まで続く塔が出現したらしいよ！」

なんだそれ、おもしろそうだな

「え、ほんと？おもしろそうね」

「そうだね、それでその情報はどこから？」

マカロニさんの質問にたいし

「私のあたしだちが森で見かけたらしいー ほら、写真！」
と答える。

なるほど、証拠付きってワケか。ならもう決まりだな

「んじゃ、その塔ってやつにいじつぜ」

というオレの提案に

「そうだね」

とマカロニさんと

「わかったわ」

ころねが返事し

「.....」

アルスが無言の同意

「おっけー！じゃー私が案内するよ！」

そうして、とりあえずオレたちは好奇心とかそんなもんで塔に向かった。

でも今にして思えばなんで不思議に思わなかったのだろうか

アップデートの報告もなしに出現した塔のことを。

オレの日常（後書き）

誤字脱字や感想など報告してくれるとありがたいです。

終わる日常(前書き)

今回は戦闘かいてみましたー的な

終わる日常

「ん、気がついたようね」

目を開ける

「なんだコロネか」

「なんだってなによ!」

ベシッ

「んで、ここはどこなんだ?」

「知らないわよ!」

ベシッ

あれ?

おかしい。

自分の服をみる。

魔法使いが着るようなベタなローブ

手のひらを握り、開く

オレはPC画面で激しい戦闘を楽しんでいたはずである

なのになんだ

この、自分そのものがゲームにはいつちやったよ的な展開

「っていつか、ここ、ゲームの中なのか？それにしても見たことない土地だが」

周りを見渡す。森である。

北の森に見えなくはないが周りに生えている木の種類が全く違う

「だから知らないわよ！」

べしっ！

「さっきからいてえよ！なんで事あるごとに叩いてんだよオイ！」

「まったくどうなってるのよ……」

華麗にスルーが決まる

だがたしかに異常事態だ。

とりあえずその木に腰掛けながら意識が飛ぶ前のことを思い出す

あのあとオレら五人は北の森にあるタワーへと足を運んだ。

北の森はそこまで敵も強くなく、ほぼ無傷で進むことができた

そして塔が見え、息を吸い込み、深呼吸して中に入った

あ、まだ説明してなかったな。オレは職業魔法使い

別に何かに特化してるわけじゃない。

全ての魔法を万弁なく最強レベルまで強化している。

オールマイティってことかな？

だが何回も言うように特化してるわけじゃない

結界魔法の防御力がそこそこ強いレベルだが防御特化型のアルスと比べたら余裕で負ける

それにオレたちのPTはそれなりに廃人スペックな気もする

このゲーム内では名が結構知れ渡っている

ような気もしなくもないような気がする…

「モンスターがないわね……」

と、ここでコロネの発言に思考と中断させられた

「かえって不気味だよね」

コロネの問いにマカロニさんが笑顔で答える

……絶対不気味がってないだろ

まあたしかにおかしいな

「おばけとかでたりしてー」

と、リサがいたずらをする子供のような表情でいう

「そ、そそそそそ、そんなのいるわけないじゃない！」

「コロネ、お前もしかして怖いのか？」

あまりのわかりやすさについ意地悪をしなくなったのでした

「ち、ちがうし！こわくないし！ っていうか速く歩きなさいよ！
ばか！」

「ははは、大丈夫だよ ほら、もうすぐ頂上です」

そんな会話をしながら進んでいるといつのまにか頂上らしき場所
でた

正面に巨大な扉がある

うわー、あやしー

「なんかかいてあるよー！」

リサがはしって扉に書いてある文字を読む……

「うーん……漢字難しいな……とりあえず、てい！」

と、文字を読むのを1文字目で放棄し、扉を押す

「ってオイ！だめだろ！ていうかなにがとりあえずだよ！」

オレは我を忘れて思わず突っ込んでしまった

のだが

「うわ、眩しい！」

扉の開いた先から今日烈な輝きが放たれて、オレのツツコミはスル
ーされた。

輝きがだんだん薄くなり、光の中に誰かが立っているのが確認できる

そして光がきえ、中の部屋に入る。

そしてみわたす。うわっ、ひろ。

なんていうか……昔の神殿みたいな作りで若干暗いけど別に困るほどでもない

そして一番奥にまた扉

その扉の前に立つ一人の老人

NPCか？

「お主ら、新しい世界へ、行ってみたいか？」

……え？

目の前のNPCと思われるヤツがそんなことをいった

オレは振り向いてマカロニさんに尋ねる

「どういうことだ？」

「新しい世界……新しいダンジョンでも追加されたとかじゃない？」

「なるほど、ありえるわね」

「よくわかんないけど、いっつー！」

ほんとテキトーだなーおい

まあ新しいダンジョンか……悪くない 悪くないぜ！

オレは老人に振りかえり

「おう！行かせてくれ！」そう叫んだ

「ほう、おもしろい。ならばコイツをたおしたら連れて行ってやる。

」

老人の目の前に超巨大な魔法陣が展開される

そしてそこからでてきたのは……

体長20メートルは余裕である前足の浮いている二本だちの漆黒の龍

……20メートル!?

でっか

なるほど……こいつを討伐すればいいのか

龍と対峙する。

オレと龍の距離10メートル。

まずは様子見だな

「ゆけ!」

老人がそう叫んだ。

龍の口になにやら炎のようなものが見え隠れしている。

……ブレスか!

その瞬間、龍の口からとてつもない勢いで炎が噴射される。

とりあえず、様子見として炎体制の着いた結界を一瞬にして2重に
はり、その結界に防御力上昇の補助魔法をかける

こんだけ硬くすればビームくらいよゆう……

って

は？

おかしい

オレの結界は1枚でロケットミサイルは防ぎきるくらいの強度があるはず

なのに

一瞬にして結界が消えうせオレに直撃……

するかと思ったその瞬間

アルスがオレとブレスの間に回り込み彼の持つ盾で防ぐ

炸裂音

そして爆風

さすがアルスだ。オレの結界をも消しとばす威力をもろともせず
受け止めやがった！

アルスがこちらに腕を突き出して親指を突き出している

攻撃はまかせろ……。そういつてるように見える

つつかなにあの余裕。

「盗賊スキル 影分身！」

うしろで技名コール

コロネの得意技影分身。コロネが次々と分身して10人ほどに分裂。そしてそれぞれがさまざまな方向に散らばり、クナイや巨大な手裏剣などをかまえ……一斉攻撃！

空中から、真正面から、左右からクナイや手裏剣などが集中的に浴びせられる

だがそのどれもが鱗にはじかれ傷一つ付けられていない

「うそでしょ……!!」

「うおりゃああああ」

リサが両剣を構え

龍の攻撃をよけて……

足に向かって猛烈な連続攻撃を放つ

剣が視覚では認知できない速さで動いているのか剣がかすんで見える。

龍の意識がリサに向けられた瞬間

「いでよ！魔剣ハルバード！」

「攻撃上昇スキル発動！」

ゴオオオオオオオとマカロニさんを待とうオーラの濃さが跳ね上がっていき

マカロニさんの腕に巨大なハルバード

2メートルちよいあるあの剣は単体攻撃専用で、魔力を注ぐことで攻撃力が跳ね上がる

続いて技名コール「インパクトストライク！」

インパクトストライク。通常攻撃の10倍だっけ？とりあえずそこはかたく強い打撃攻撃のはずである。それに攻撃上昇スキルつかってるからきつと軽く尻餅くらい着くんじゃないかあの龍？

巨大なハルバードを高々と振りかぶり

龍の頭めがけて……

激突

そして二度目の炸裂音

だが今回はマカロニさんの攻撃によるものだ

そして続いて爆風

龍が衝撃に耐えきれず前足を着く

龍が立っていた場所を中心に放射線状に地面にヒビがはしり、小規模なクレータを作る

砂煙が舞い、マカロニさんが飛び下がり、コロネもリサも戻ってくる

砂煙が張れ……そこに現れた龍の頭の鱗にヒビが入っていた。

グギユウウウウウウウウ

龍がぶちぎれたとばかりの咆哮を吐きだす

なるほど、つまりあのヒビが入っている場所がいま一番もろい

そこを集中攻撃すれば……

「マカロニさん！リサ！」

「そうだね」

「おっけい！」

どうやらアイコンタクトで理解できたらしい。

しびれを切らしたように龍がものすごい速さで突進してきた

「重力魔法グラビトン！」

オレの重力魔法グラビトンは相手にかかる重力を増やし、動きを制限するというものだ

龍は攻撃主がホタリンだときずくと、固まった姿勢のままブレスを
はく

すかさずアルスが盾で防ぐ

そしてマカロニさんが技名を叫ぶ

「範囲攻撃上昇スキル発動！」

これでマカロニ含むトリサの攻撃力が飛躍的に上昇

ついでリサの攻撃

「双剣使スキル 百烈斬！」

やく5秒間で100ちよつとの斬撃を放ち龍の頭部に命中する

よし、頭部の鱗がもうほとんどついてないうえに血が滴っている

いける！

そしてマカロニさんがハルバードを肩に担ぎ

「ジャツジメント……」

マカロニさんが技名をしゃべりながらジャンプし……

もはや鱗がはがれ血まみれの龍の頭へ

「インパクト！」

大爆発にもいた衝撃がオレの身体を虫ケラのようにふきとばす

砂煙が張れ、そこにいたのは

ハルバードを振りおろした後のようなマカロニさんと そこに立つ龍

静寂。

スウッと龍の頭から縦にラインがはしり

全身から血を吹き出しながら無数のポリゴン状となって消えていった……。

「よっしゃあああ！」

「やったわ！」

「イエーーーーー！」

「あはは、かつちゃったね」

「……………」

いやー一時は死ぬかと思ったぜ

オレは皆とハイタッチしているところで、さっきの老人がきた

「なるほど……つむ、よろしい。ではむじつにある門をくぐるがい。」

オレたちは門をくぐりぬけた。

中の部屋はさっきの部屋のように広くなく、そこらへんの学校の教室よりちょっとせまいくらいの広さ

その部屋の中心の空中に停滞し、なおもゆらめきながら輝く光

転送ゲートみたいだな

このセカンドワールドというゲームには転生ゲートというものがあり、

街の中央やダンジョンのボス部屋の後などにあり、街に戻ることができるうえ、他の街にも行けるとい

非常に便利なしろものである

でもこの転生ゲートの輝きかたハンパな

まぶしいって

「最初の輝きはこれね」

コロネがいう。なるほど

そしてオレ達5人は順番に光の中へと飛び込んで行った

そしてそこで意識が途切れる

回想終了

「あーなるほど、老人の言ってた新しい世界って別世界のことか？」

「コロネに問う。

「やっぱりそうなるよね……」

「もう意味わかんないわよ！」

「まあ落ち着けてオイ」

グシッ

「いやだから痛いってー！」

「とりあえずはやく仲間と合流しなきゃ……」

そういうわけで、適当に森をさまようホタリンとコロネであった。

終わる日常（後書き）

誤字脱字訂正しました

私達の初日（前書き）

とりあえずこの2人から始めます

私達の初日

「あー、なんか迷ったっぽいな。オレら」

となりでのんきなことをいつてるバカはホタリン

赤髪で全体的に長く、前髪は左右に分けているが右目が隠れて見えない

最初はチャライ印象を受けたがそうでもない

まあ、どーでもいいけど。

っていつかのんきすぎるでしょ！

「もぉー疲れたわよ…。なんとかしなさい」

「できたらしてっつて」

はあ…

ほんとほこいッ面白がってない？

「そついえばちあ」

「なによもつ」

どうせロクでもないことだろうと私は思った

「腹、へっつてない？」

あー、そういえば私昼飯抜いたんだっけ

「まあ、それなりに……」

「なんかさー、この森結構深いと思うんだよ。食料調達とかしたほうがいいよね？」

うわー。

なんかすごい軽いノリみたいな雰囲気であと数日かかんじゃねみたいなこといつてる……。

でも、それもそうだ。

もしかしたらそれくらいかかるかもしれない

「そうね……。どこかに食べ物……」

周りをきよろきよろしながら歩いていると草村からイノシシのようなモンスターがでてきた

なんか、気持ち悪い……

皮膚の色が紫なところがまた……これは無理ね

絶対まずそ……

「おお、うまそうなヤツ！」

え？

「え、まさかあんたアレ食べるつもり!？」

「おう ファイヤー！」

イノシシもどきが炎に包まれて

……灰と化した。

……。

「やべ火力しくった。」

「なにやってんのよ!」

ホタリンの頭を殴る

ベシッ

「ちよ、いてえって。なに？もはや癖にでもなってる?」

となりで何か言ってる気がするけど無視する

はあーもう、次出たら私がしとめよう

そんなことを思っていると2回目のエンカウント

「お、発見!」

さっきの失敗など忘れたかのようなホタリンのテンションに半ばあきれつつ

「こんどは私がやるから」

獲物にクナイを投げる

今回もイノシシのようなヤツで、おそらく頭が弱点だろう。そう思
って額を狙う。

額に吸い込まれるようにクナイが突き刺さり ドビュシヤ!という
少々むごたらしい音と血しぶきがとびちり、その場に倒れる

「うおー、こえー」

べっつ

「とりあえず、なんかもう暗いからそこから入んで寝ようぜ」

ふと空を見上げる

みあげた空はいつのまにかそろそろ夜を迎えようとしている。

すこし開けた場所に移動するホタリン

「ここら入んでいいか。」

と、いいながらさっきのイノシシを木の枝を器用に組み立てて火あ
ぶりにしながらいう

準備はやつ！

そして落ち着きすぎでしょ！

え？何？実際森で迷ったことでもあんの？

昔からだけどホタリンはマイペースすぎると思う。

「お、うまそうじゃね？塩がほしいよなー。……うお、うめえ！」

とか思考を巡らせているとホタリンがそういつつ肉をほおばるホタリン

私も食べる

「お……おいしい。」

「だろ？オレ才能あるかもしれない」

丸焼きに才能もなにもないと思うんだけど……

「てゆうかさー、オレら本当に別世界ってやつに来たのかな」

食事中にホタリンが独り言のように呟く

「わからないわよ。でも、それが一番納得できるわ」

「オレさー、実は楽しいんだ」

え？

「いやほら、むこうじゃ学校でも友達あんまりいないし、勉強もめんどくさいし、毎日帰り道にあー別世界とかいきたいなーとか思っ
ててさー」

なんか、意外だった。

ホタリンの性格上むこうでもエンジョイしてそうな感じだったけど

「まあオレとしては一日の楽しみがネットゲームをしてる時くらい
だったんだよ。でも今はちがうだろ？こっちには親友がいるし、戦
えるし、だから、今もお前といれて楽しいぜ」

なんか恥ずかしいな…

べ、別に嬉しいとか思っ
てないわよ？

「どうした？ほっぺが赤いぜ？」

「も、もとからよ！」

がしっ

「痛いっ！」

でも、それは私も似たようなものかな

わたしことコロネは中学生のころ仲間外れにされて自室に引きこも
る毎日を送っていた。

毎日毎日のように自室にこもり続け、ネットゲームでひたすら敵軍を薙ぎ払い続けた。

ずっと単独狩りをしていて、レベルもプレイヤースキルも上達し、スキルも強くなっていき、まるで廃人プレイヤーのようだった。

ってというか廃人だったな私。

そんなぼっちプレイを続けていたある日、私にPT勧誘の声がかかった。

それがほたりんだった。

当時のイベントでボスが強いと聞いたが、おそらくそれだろう

私もソロでは倒せなかったのでPTすることにしたのだが、その日から毎日が楽しくなっていったのである。

「おい、どーしたばーっとして。熱でもあんのか？」

と、一人昔の記憶を懐かしんでいたら突然そんな声とともに額に手がのびてくる

「ばかっ ないわよ」

伸びてくる手を払いのける

「ああ、なら別にいいんだけどね」

そう話してるうちにだんだん意識が睡魔に支配されてくる

「あー、そろそろ眠くなってきたな」

「そうね」

「んじゃ、寝るわ。オヤスミ……」

そついい彼は上半身を木に預けた姿勢で寝てしまった。

私も寝るかな……

普通なら知らない森で布団もないのに寝るなんてできるものではないが

この時ばかりは心地よく眠ることができた。

「神様、本当によろしいのですか？あのもの達で」

「いいんじゃないよ。おぬしも映像は見たであろうっ？」

「ええ」

「あの龍はむこうの世界でS級に属するドラゴンじゃ。つまりトゥッブクラス。大丈夫、彼らならきつとやってくれるじゃろ」

「だと、いいんですけど……」

はじまりの街（前書き）

最近、やわらかい歯ブラシ買いました。

はじまりの街

翌日、オレらはまた歩き出す。

「ねえ、あとどれくらいかかるとおもっ？」

「さあー」

んなこときかれたってねえ……

「まっすぐ歩いとけば……って、おお！」

なんか人が通るような道を発見した。

これ、街とつながってるって感じがするぜ

「これ、もしかして街までつながってたりする？」

隣にいるコロナも同じことを考えたようだ。

「そうじゃね？とりあえずこの道をまっすぐ進もう」

「……そうね」

よし、順調順調。

「今がだいたい朝9時くらいだから……」

「なんでわかんのだよ」

「オレの勘！」

「……はあ」

なんだそのあからさまにがっかりした顔は

オレの勘は結構当たるぞ？

「まあ、昼時には街に着いたほうがよくな？　メシくいたいし」

「でもお金とかはどうするの？」

あー、そうか。すっかりわすれてたぜ

「どーすっかなあ……」

金がないと飯食えないじゃん……

などと悲しんでいたらコロネが

「あれ？あれって人じゃない？」

よく見ると20人くらいの男の人達があるいている

オレ達は歩いて近づいていくことにした

ことにしたのだが……

どうやら山賊の方たちだったらしい

「動くな！」

「はいはいもーわかったからうつせーな」

「ナメてんのかゴルア！」

短気なヤツは苦手なんだよなオレ・・・

「野郎共！」

「お、おやびん！」

山賊の輪の中に2メートルはありそうな大男が入ってきた

「お前らしいもんもってそうだな。荷物を置いてけ。そしたら命は助ける」

「私達荷物なんてもってないわよ？」

「あ？ゴルア口答えしてんじゃねえゴルア早く出せゴルア！」

子分みたいなヤツが叫ぶ

そこでオレはあることに気付いた。

なんだ、メシくらい食う金 手に入るんじゃね？ってね

「あのさー、聴きたいんだけど」

「いってみろ」

おやびんさん公認である

「そつちこそ、なんか売れるものもってない？あつたら譲ってほし
いんだけどさ」

「……。」

おやびんがなんか納得したように言う

となりでコロナがこいつ何言ってるのよ！！！とでも言いたそうな
顔をする

「どうやら殺されてエミたいだな……。野郎共！かかれえええええ
！」

そう、つまりこいつらをブツ倒して、こいつらのもってるもんなに
か奪って街で売っちゃおう的な

まあ、予想通り襲いかかってくる盗賊達

子分全員がそれぞれコンボウや剣やナイフを構え、一斉に飛びかか
ってくる。

「ちょ、どうするのよ！私こんな大人数無理！」

「いいからいいから！重力魔法グラビトン！」

ズウウウン

対象はもちろん子分。重力を3倍くらいにする

続いて……

「雷魔法サンダー！」

範囲はもちろんさっきと同じく子分たちに設定する。重力魔法で身動きが取れなくなったところで電撃魔法を浴びせてしびれさす。これで子分共はかたずいた。

「きゃ！」

短い悲鳴が聞こえる

「へっ！ 調子こいてんじゃねえよ兄ちゃん！」

いつのまにか親分がコロネの後側から抱きつく。

「動いたら命はねえぜ！」

あー。

あいつ、死んだな。

コロネは潔癖症らしく、知らない人とかに触られるのをひどく嫌う

「殺ス」

うわ切れた

「…!？」

気がついたときにはコロナはおやびんの背後に回り込んでいた

だがもう遅い

バタツ

倒れる

一瞬だなあ……。

……死んでなきやいいけど。

「なんか、ごめんな」

「え？ なにが？」

「んまあ、いいや。なんか探してくれ。一応山賊なんだからなんかもってるだろ」

「なるほどね」

そう思い一人一人のポケットやら袋をのぞかせてもらう

「あーいいのもってねえなコイツら」

「そうね……あ、ねえ、この袋なんかどお？」

親分にかけより

「うそだろ……おやびんが負けるなんて……」

そう眩き気絶った

あの人結構強かったのかな？

……瞬殺だったけどね

にしてもすごい早業だった。コロネだけは敵に回さないようにしよう。

「なによ……」

「いやなんでも？とりあえずあつちに歩いて半日ってことは走れば余裕だな」

そう思つてオレは自分の重力魔法グラビトンを応用して重力操作を発動し自分にかかる重力を軽くする

そして風魔法ですばやさあげる。

重力魔法は結構使い勝手がいい。オレの得意技みたいなものかな？

コロネはなにもスキルを唱えない。まあこいつは素でめっちゃ早いしな。

「じゃ、出発すつかあー」

「ちゃんと付いてきなさいよ」

そうして2人はものっそいスピードで森の小道を走るのであった。

半日つつつたからそれなりにかかると思ったがどうやら誤算だったようだ

30分でついた。

「さあーて、ついたついた」

そこには超巨大な門があり、周りは高さ30メートルほどの塀にかこまれていて勝手に入れない

そしてその門の左右に兵士の格好をしてランスと盾を装備した2人のいかにもな格好をした門番が待ち構えていた。

「すみません、中に入りたいんですけどー」

コロネの問いに対し

「見ない顔だな……まあいい、通れ。」

いいのかよ！

見ない顔っていったのにあんがいあっさりいってしまった。

門をくぐると……

「うわ、広！」

という言葉が口から洩れた。

しばらくぼーっとする

「とりあえず、店……めんどくさいから適当なところで買っか」

「まず宿じゃでしょ？ 昼ごはんも付いてそっだし」

おお、それいいかも！ ついでに寝る場所も確保できんじゃん

とりあえず宿を探すことになった。

「すみません。宿ってこれ1枚で何日くらい休めますー？」

宿屋っぽい雰囲気のものなりに豪華そうな建物のカウンターにいるおばちゃんにオレは尋ねる

「銅だったら1枚で1泊だね」

腰にかけてある腰巾着をみる

さつき数えてみたら銀が2枚で銅が2枚あったところからするとこの宿でだいたい22日分らしい

22日か……十分だな

「全額で22日分らしいぜ कोरोネー。どうする？もうここに住んじやうっ。」

「何言ってるのよバカ。仲間探しはどつするのよ！」

「んー、じゃあ一応ここ拠点に動こうぜ。この街結構広いし、いろいろそろってるだろ」

「それならまー……。」「

「じゃおばちゃん、とりあえず1週間くらい貸してくれ」

そういったあといろいろ部屋についての説明を受けた

「あいよ。105号室があんたらの部屋だ。荷物とかおいてきな」
鍵をわたされる。

階段を上がり……おお、あったあったここがオレらの拠点か

玄関を開け、短い廊下を進みリビングっぽいところにはいる。

リビング広いな。

縦横5メートルってところか

「へえ、結構いい感じの部屋ねこい」

कोरोネに同感だ。

日当たりも良く、窓から気持ちいい日差しが入ってくる。部屋の中にテーブルがあり、ベッドが4つほどついている。なんでベッドが4つも?と思ったがご家族づれとかのためにも用意してあるんだろう。と一人で納得する。

ちなみに風呂とトイレもばっちりである。トイレが和式の水洗トイレだったことに胸をなでおろす。

洋式はなんかおちつかんのである。

ふう。

一息つく

「めしだな。」

おばちゃんいわくもうすぐ昼飯が届くとのこと。

メニュー表を渡されたが、「おまかせで!」という返事をしたのでなにがくるかわからない。でもこういうのって何が来るかわからないからワクワクするワケで

「失礼します。」

玄関をノックされたあとそんな声が届く

「うお、きた! どうぞ〜」

なんかテンションがあがるのである。

返事後、メイドさんが入ってきて、皿などを持ってきてテーブルに並べてくれる。

「では、失礼します」

運ばれてきた料理は……

黒木和牛を思い出させる分厚いステーキにサラダっぽいのが添えられてある。

うお〜うまそう。

一方コロネのほうにはサカナのフライのようなものが並べられており、白ご飯、味噌汁のようなものが並んでいる。

和食かぁ

「さて、いただきましたっす」

「いただきます」

うまい！昨日くったイノシシのあれとか比べ物にならんくらい上手い！

「おいし〜……」

コロネもそう呟く。

しばらく無言で食べ物を中心に運び続けながらコロネがこんなことを

言い出した

「みんな大丈夫かなあ……………」

「それもそうだな…………。でもまあ大丈夫だと思うぜ？強さ的に」

オレ達がもともとしていたセカンドワールドというネットゲームはファンタジーな世界で剣や魔法を使って冒険するといったアクション系RPGなのである。

そしてレベル上げについてだがそれが相当マゾ仕様となっていて、レベルは最高100らしいけど69から70にするときは本気で頑張って30時間かかった。流石に死ぬかと思った。

まあ、いまのところセカンドワールドで一番レベルが高い人が92だそうだ。まあ、レベル80以上なんて数えるほどしかないんじゃない？

たしかプレイ人数が5万人とかだったはずである。そこそこ人気ゲーなんだな。

それにオレはレベル75　コロネはたしかレベル73とかいってたっけ

つまり結構すごいのである。

リサはもうちょっとでレベル65とかはしゃいでたな。マカロニさんは75。オレと一緒にである。

アルスはまだ知らない。結構長い付き合いなのだがまあともかくい

るんなどころが不明なヤツなのだ。憶測だがオレより5くらい上なんじゃないかと思う。

それにレベルとは別にスキルレベルというものがあり、たとえばマカロニさんが使うストライクインパクトはレベル83。使えば使うほどレベルが上がっていく感じである。

そしてオレらPTはそれなりに有名だ。アルスに関しては知らないもののほうが少ないんじゃないだろうか。

なんせほぼすべてのステータスポイントを防御にふっており、HPもありえないレベルまであるらしく、どんなに強いボス戦でもHPが7割を下回ったことはないらしい。さすが世界^{アルス}の境界線^{ライン}。

つまるところ、オレ達全員上級者なので戦闘能力的な意味では心配ないだろう。

「強さ的に・・・ねえ。まあみんな問題なく強いのは知ってるけど、私はリサが心配なのよ」

あーなるほど。それには同感だ。

なんたつてあいつは幼い。

最初あったとき小学生かと思ったけど一応中学生らしい

変なおじさんとかに誘拐とかされないだろうか。

「まあ、マカロニさんかアルスと一緒にいてくれたら大丈夫じゃね？」

「そうだけど……」

「とりあえず、自分達の心配だな。これから買い物いこうと思うんだが一緒にいこうぜ」

オレの誘いに

「そうね」

と、短い返事

銀貨1枚だして銅貨が3枚帰ってきたのでいま現在銀貨1枚銅貨5枚である

そういうわけで、買い物のために街を回ることにしよつと思つ。

57

「はあゝあ」

あくびがでる

「おい、まじめにしろよ」

門の反対側に立っている門番係りの上司のジエイドさんに注意される

「そんなこといったってですよー。暇なんですよ。こんなとこくるわけないじゃないですか。例のヤツ」

例のヤツとは最近噂になっている全身鎧に包まれた鎧の剣士のことである。

聞く限りどんな攻撃も通用しないとか。

まあとりあえず不気味だからそんなヤツみつけたら報告しろだと。

「ガタガタうるせーな。門番つーのはそんなもんなんだよ。文句垂れるようじゃこの仕事はやってけねーぞ」

門番なんて立ってるだけで楽かと思ってたんだけど

立ってるだけってのも大変だなあ

はじまりの街（後書き）

和式っていいですね。

街でぶらぶら（前書き）

街の名前とか背景をそんなに書いてなかったんでいろいろ書いてみました。

街でぶらぶら

とりあえず街を探索することになった。

「うおー人が多いー。うお！」

となりでホタリンがなぜかハイテンションである。

っていうか、アレ？ あいつどこいった？

と、思ったら右側に見える店で

「おっちゃんそれ何円？ まじうまそー」

よだれが垂れそうなアホッ面で店員のおっちゃんとしゃべってた。

……迷子になってもしらないんだから

「円？2つで銅1枚だけ。まいど！」

「センキューー！コロネ、うまそーだぜこれー」

私の心配なんか気にもとめてないような雰囲気ですっちに歩いてくる

まあ、当然といえば当然か……

「んー？ ふおーふいふあ？」

隣でホットドックみたいなのをくわえながら「んー？ どうした

？」「と聴いてくる

っていつかなんでわかったわたし。

「いや、別に？ それにしても人が多すぎるわね……店も無駄に多いし。なにかイベントでもあるんじゃない？」

「ふぁー、あうほごー」（あー、なるほどー）

っていつか食べ終わってからしゃべりなさいよ！

「……ん……んあ、やっと食い終わった。はい」

そう言われて、さっきのホットドックっぱいのを賣つ。

結構おいしい……

礼を言わないとね。別に嬉しかったとかじゃなくて、いやもちろんうれしかったけど礼儀としてね？

「あ、ありが……」

途中まで逝つたところで気づいた。あれ？

あたりを見回す。

どこいったアイツ！後で絶対叩く！

と、思ったらこんどは道の横についてあるベンチで暇そうにタバコにみえる棒をくわえながら新聞を読んでいるおじさんとしやべって

いた。

「まったく、ちょっとはひとみしりしなさいよ

「あのさー、聞きたいんだけどさーおっさん」

「ああ？なんだいポーズ」

「今日なんか、イベントでもあんのか？」

「あー、さっそく聞きたくなっただってわけね。

なにこの無駄な行動力。

「おいおい冗談だろうポーズ。あんた知らねーってのかい？明日はここでこの前召喚された勇者様が出発するんだろっつが。ほら、ここにもでかどかどか書いてある」

「そっついでおじさんが新聞も持ち上げてホタリンに見せる。

「なんか、貴重な情報そうだ。とりあえずホタリンの所へいこう。」

「なんの話してんのよ！勝手にいなくなっつて」

「ベッコッ」

「まあ最初から聞こえてたけど、めんどろなので途中から来ましたよ的な展開に持ち込む」

「まーいいじゃんいいじゃん。てゆーかみてみるよこの記事。」

そこにはでかかど『二代目の勇者降臨!!!』と、書いてある。
なになに……1か月前魔王を倒すために召喚された勇者様がついに
出発!ということでアルデート国で出発式があるもよう。

ここってアルデート国っていつのか。

「おっと、彼女かい？ポーズ。おじさんうらやましいぜ」

「ちょ、ちがいます！ そんなんじゃないですまだ！」

「まだ……ねえ」

ニヤリ……と笑うおじさん。あーなんか腹立ってきたー。殴っていい？ 殴っていいよね

「いや、落ち着けてまじ。こわいよ」

ホタリンに注意された。あれ？わたしって結構表にでちゃうタイプなのかな？

「まあー、おじさんいろいろ教えてくれてセンキューな！」

「元気でなー」

別れを告げて、ふたたびぶらぶら。

ってゆーかここほんとに広いわね……こいつ迷子にならないように気をつけないと

……つてどこのお母さんよわたしは

それから何時間が歩いていたらギルドという文字が書かれた看板が立っている大きい木造建築を発見した（日本語でギルドとかかいていたわけじゃないけどなんとなくそう読めた。通訳機能でもついているのかもしれない）ので入ってみることにする。

中はちょっと、いや酒やら汗やらいろいろな臭いが混じっていて変わった臭いがした。

テーブルや椅子が並び武装したむさくるしい人たちがまっ昼間からお酒を飲んでいる。

文字通りギルドってことね。あのクエストとかつけられるような

とりあえずどーするのかホタリンにきいてみ……ようと思って横を見たらすでに彼は私の隣にはいなかった。

あーもう、うるちよろしすぎでしょ

「なあーお姉さんここってギルドでしょ？クエストとかつける的な」

……。

……敬語ぐらい使いなさいよ！

「はい、ここで未登録の方は登録して、すでにご登録しているお客様はむこう側にあるクエストボードに張ってある紙をこちらに持ってきてクエストを受託します。ご登録なさいますか？」

「うんするするー、こっちの人と一緒に」

「かしこまりました。ではこちらの紙にご記入ください」

そついい紙を渡されたので、二人して書く。

名前はー……ころね

得意武器が……なんだろう。一応ナイフってことで

出身地？どうしよう、わたし達アルデートしか知らない。

「ねえ……出身地どうしたの？」

「ああ、適当で良いだろう。すんごい田舎で昔ほろびたとかいって
け」

うわー、テキトーすぎる。

まあ、いまのところそのてを使うしかない

そつ思い、私はテキトーに思いついたアルゼンチンと書いた。

「あの一、書けましたー。」

そつ言つとさっきの女の人が紙を受け取り……困った顔をする。

「あの一、すいません。なんて読めばー……」

そこで私は気づいた。

文字は読めるけど書けない！

「いや、すいません私遠い国で育ったものでまだこっちの言葉は書けなくて……」

と、とっさに思いついた嘘をいい、女の人に言葉で伝えて書いてもらおう。

ホタリンは隣で何やらゴソゴソしている。

っていつか紙白紙のままじゃん！

「ちょっと、何やってるのよ……！」

と、聞こえるか聞こえないかくらいの音量で聞く

「いいからいいから……よし」

何かの準備が整ったかのような返事をされる

「オレ、この前手をケガしちゃって……書けないんすわ。書いてもらえますー？」

そっとうホタリンの右腕にはいつの間にか包帯が巻かれていた。

なるほど……

こういうときだけ無駄に頭がキレるところは素直に尊敬するわ

「かしこまりました。まずはギルドについての説明をさせていただきます。ギルドにはF、E、D、C、B、A、S、SS、SSS、という段階に分かれています。いまはお客様が一番低いF級からのスタートになります。ランクが高ければ高いほど強いモンスター討伐や入手困難な素材収集と難しくなりますが、報酬もそれに合わせて高く設定してもらっていますし、普段達していることのできない禁止区域にも入れるようになります。次に上げ方についての説明ですが、1つ上のランクを10回クリアできれば1つ上、2つ上のランクを5回クリアできれば1つ飛んで2つ上、3つ上を1回クリアすればさらに1つ飛んで3つ上のランクに上がることができます。どこかわからない場所などおありでしょうか？」

と、女の人が淡々と述べる。

別にわからない点は無かった。きっとこの人の説明が上手いからだろうか。

隣を見る。

……。

「あ、ああ悪いやなに謝ってんだオレ。ん？あ、いや何でもないよ？別に。え？説明終わった？わかんないところは別になかったぜ？ほんとほんとありがとう！」

絶対寝てたな。

「そうですね。それでは説明は異常となります。では、私はこれで。」

そういい、カウンターの奥へ消えて逝った。

「あんた、寝てたでしょ？」

「ああ、ほんのちょっとな。ちょっとだけだよ？ まじ。F級からスタートなんだろう？ 余裕余裕」

いやそこ始めのほうだし。

うん、こいつ始まってすぐ寝たな。

「はあ……わかんないところはわたしが宿で教えるから。いい？」

「ああ……なんかわるい」

なんか ってなんだろう。

あー、なんか日も暮れてきたな。夜ごはんもそろそろ運ばれてきそうだし帰るとするかなー

「そろそろ、暗くなつたし、帰ろうぜー。あー腹へつた」

「あんた昼あんだだけだべた上に間食もしてたじゃない。」

「そーゆーお年頃なのさッ」

はあー、まあいいや

そういえばコイツ何歳なんだろう。

性格的に16歳くらい？

とりあえず、わたしと同じ年齢という設定にし、勝手に納得する。

さてと、帰ろうか。

そう心の中で呟き、帰ることにした。

帰るときはちょうど夕日が沈み始めるところで、レンガ作りや木造の家がいい感じに赤く染まり、非常に綺麗だった。そういえばこの街って中世ヨーロッパみたいな感じだなあ。

あたりを見回す。

街の北側にはかなり大規模な城が立っている。大きさはというと東京ドーム1個分くらいあるんじゃないかと思う。まあ東京ドームなんて見たことないけどさ？

あー、なんか綺麗だな

なぜか懐かしさに似た感情が湧きあがってくる

「あー綺麗だな」

となりでホタリンが言う。ホタリンもわたしと同じところをかんがえていたらしい

「あの人」

うん、前言撤回。

バシッ

「いってえ何すんだよいきなり！」

「べ、別に？ ほら、もう宿見えてきたわよ」

「お、おう……」

頭をさすりながら返事をする。

改めてみるとこの宿屋、大きい。

それに今気づいたけど二階建てらしい。それに木製だ。煙突から煙が立っているのはあそこらへんに料理する厨房らしきものがあるからだろう。

昨日来たばかりだというのに、すでに自分の家のようになじんでいた。

その後夕飯を食べ、布団につく。

はあー、今日も疲れたし早めに寝よう。

つてことで早めにお風呂に入ってベッドでゴロゴロしていると

「お前もつ寝るのか、まあ今日は結構動いたし、オレも眠たいんだけどね」

んなどこでなにすんだよオイって？ ツチツチツチ それは実験さ！

……誰にしゃべってるんだか

とりあえず結界魔法を発動させる。

この魔法は薄っぺらいけど硬い魔法でできた壁を作ることができる

それをどうにかして形をかえて腕を包むようにさせる。

そして地面を殴る。 てい！

痛くない！ っていうかなんか地面が割れてるし

次にグラビトンを発動する

重力が発生するのは目の前。それを結構の出力度合いでする

するとオレの体は吹っ飛ばされたように吸い寄せられる

やはりな……

ゲームの中じゃただの防御魔法としてしか役割は無かった。重力魔法だって相手の移動速度を少し下げることくらいしか使い道がなかったはずだ。こっちに来てから使い方の応用が利きやすくなってやらあ。

ということとは……。

その後、いろいろやってたら朝になった。

「ふむ、今後の戦闘が楽しみだ」

だがホタリンは眠くなるどころかテンションが上がっていたのだっ
た。

世界について（前書き）

徹夜明けってなんか頭がまわらないですよね。

世界について

あー……

眠い……眠すぎるぜ！ うおおおおお

やば、おかしくなってきたやつた テヘッ

現在昼くらい

だったっけ？

知らんわ！ 太陽がでてれば昼なんだよ！ え、そうなの！？
そ
うかも！

「あ、あんた目の下のクマがすごいけど、何してたの？昨日」

「いやあ、魔法がやばくって、テンションが上がったのさ。7秒ほど」

「え、魔法がやばいってなに？ しかもテンションが7秒上がった？
っていうかほんとに大丈夫？」

あー、あごひげがせつない……

自分のアゴをさする

……！

「あごひげが生えてねえ!!!」

「あんたちよつと大丈夫？ 寝てきなさいよ！ 勇者様の出発式とか面白そうだから見ようぜとか言ってたけどそれじゃー無理でしょ？」

「え？まじでー。なんか感動……」

つていうか眠い！ 眠すぎる！ だがそこがいい！ え、いいのかわよ！ いいんだよ

「どこに感動する要素があるのよ！とりあえず始まるのは昼4時からいっほいしそれまで寝ときなさい！」

なんか……目の前にモヤがかかっている……

「……。」

そのモヤがだんだんと人型になっていき

「……どうしたのよ、目の焦点あってないわよ？」

これは…2年前に死んだ……

「おばあちゃん!？」

「誰がおばあちゃんよ!！」

ガッン！

なんかわかんないけどひどい頭痛で意識を失った。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

今、街中でぶっ倒れたホタリンを引きずってベッドに寝かせたところである

まったく意味がわからないわ

なんかいつてることが支離滅裂でしゃべってる途中も目の焦点があつてなかったような

つていうかなによ！ 誰がばあちゃんなのよ！ 失礼しちゃうわね！

腹いせにベッドの下のシーツを和室っぽい部屋の床に引いてあったタタミにすり替えてやったわ。 はは、目が覚めたときに顔にタタミのあとを思っ存分つけるがいいわ！ あははははは！

はぁ……

私も、寝たほうがいいだろうか。

とりあえず部屋で武器や装備の手入れでもしようかな。

「武装解除」

ジュイーン

一瞬光のエフェクトが発生して消える。 中身はインナーである。
なんかあの、タイツみたいな

あとから気づいたけど、装備品はすべて名前を呼べば装着できて、
はずすときは「武装解除」っていえば消える。そこらへんはゲーム
と同じである。

どんな装備にも付属している袋。

これが便利だ。今までのゲーム上のシステムでは50種類収納でき
1種類につき999こまで持ち運び可能だったのだがまさかこの袋
にもそんな感じになっているのだろうか。

だったとしたら助かる。おまけに小さいから邪魔にならないし

そんなことを考えながら手入れをしていたら案外すぐ終わってしま
った。

さて、なにしようかな

うーん……

迷った結果ギルドにでもいっているいろいろ情報を集めようということ
になった。

こんなに大きな街ってことは結構栄えている証拠だ

ならばそこに立っているギルドなんて設備も他の街よりしっかりし
てるはずだし、お城があることから情報とか豊富そうだ。

まあ、ほかの街なんて知らないけど道をあるく。

昨日ホタリンと歩いていたから家の周りはいたい歩けるようになってる。

そこでみつけたギルドに入る。

だが意外にもガランとしていた。

「どういたしました？ お客様」

左ななめ前のカウンターから昨日お世話になった受付嬢がこちらを心配そうなかおをしている。

よくみると青い髪で青い目のどっちかという綺麗な顔立ちをしている。なかなか美人である。

「あの一……？」

しまった、見つめていたようだ。

「あー、すみません。 っていうかなんでこんな人いないんですか？ 酒とかで盛り上がってるかと思ってたんですけど」

そう、つまりあのむさくるしい人たちなら結構クエストとかやってるんなとこにいきそうだからと思っでそこを狙ってきたんだけど、どっつやらそれは無理っばい

「あー、それはですね。昨日みんな勇者様を見にいくとかいって盛り上がってましたし、民衆にでもまぎれてると思います。なにか、お困りでしょうか？」

おお、鋭い。いまこの人しかいないし説明も昨日で聞き取りやすかった。なのでこの人に頼むことにする

「あー、わたし文字が書けないことからわかっているとありますがかなりの田舎ものなんです。この鎧は母の形見でー。それで、いろいろ世界について知りたいから聞きに来たんですけどー……」

なんで母の形見って嘘言っただけか？

だってこの装備外見的にすごい立派なんだもん

田舎者って言ったって説得力にかけちゃうじゃない

「そうですか。私でよければ説明しますよ。今お客様もいないですし」

「あ、すいませんお願いします！」

ああ、なんていい人なんだろう

さっき嘘ついたことに罪悪感を感じてくるじゃない

それからわたしはこの人にいろいろなことを教えてもらった。

それをまとめてみると、こうなった

この街は北国アルデート

絶対王制で、武力もかなりある

それでおおまかにあと3つの国があり

魔法が主に栄えている自由な西国ウイステラス

独自の文化を築きあげ、おもにカタナという剣を使い手とする剣士が多い東国ジャッパン

平和を愛する南国ハイワード

それぞれそこそこ独立してるし交流もあまりないからそれ以上はあまりわかりませんとのこと。

そして戦闘については、気と魔力が全てらしい。気はおもに剣士や接近戦が筋力強化などにつかったりするっぽい。魔力はそのまま魔法であるがうちのバカが使う魔法とはちよつと違った。まず決められた呪文を唱える。それで頭の中で魔法陣をイメージすることによって魔法陣が発生。それでやつと打てる。かなりの上級魔法使いは無詠唱で魔法を発動できるらしい。じゃーうちのバカって魔術師として結構強いほうなのかあ

あとこの世界には天界と魔界が存在するらしく、天界は神様が、魔界では魔王が統一している。天界はあまりこつちの人間界に干渉してこないけど魔界はその限りではなく。たまに魔物を送り込んできたり街を潰そうとして滅ぼそうとしているかららしい。なんでそんなことをするのかというと魔王はこの世界を支配したいらしい。世界征服……ぷっ 子供みたいね

ちなみにその魔物の群れとかもクエストの対象になるらしい。

ギルドというのはかなり昔できた制度らしく、金と引き替えに依頼をこなしてもらおう。これではただの便利屋だが、仕事をこなしていくうちに強くなっていった冒険者は国から依頼されたクエストなどを受けることができる。依頼主が依頼主だけに金額ははんぱない金額な上、国のほうも助かるというワケで結構できた制度だなあと一人で納得。

まあ、そんな感じだった。

「ありがとうございますましたほんと助かりました！」

深々とお礼をする。 だってめっちゃわかりやすかったんだもん

「いえいえ、私のほうも暇でしたので。べ、別にお礼なんて……あの、また気が向いたらいらしてくださいね」

「はい、絶対きますね！」

そついい、ギルドを後にする。

空を見上げる

結構長い間ここにいたようだ。 あいつも起きてるかもしれないし戻ろうかな

そうして宿屋の自分の部屋まで歩いて帰る。

何時くらいだろう今。

お城のほうを見る。

なんかお城から街の外までつながっている大通りの両側に人が張り付くように集まっているのが見えた

なるほど、そろそろご登場ということか

勇者って召喚されたのよね。 ってことは日本から来たとか……いや、ありえないか。世界なんて無数にありそうだし

そんなことを考えているうちに家に帰りつく。

……。

まだ寝てるし！

いつまでねてんのよ。

ジー……とホタリンの顔を覗き込む。 気持よさそうに寝息を立てている

そして、いきなりホタリンの目が開かれた

「う、うわぁー！」

びっくりしたー！ いきなりおきんなっつーの！

「ん？どうしたんだ？コロナ。そんなエロ本を読んできるところを親

に見つかったときみたいな顔をして。　　ってあれ？　なんでオレ寝てるんだ？　たしかに外に出たはず……」

なにそのたとえ！　意味わかんないし！

「覚えてないの！？　あんたすごかったんだからねッ！」

「え、何が？」

マジで覚えてないのかしらこいつ

まあ、いいや

説明するのもめんどーなのである

「てかいま何時くらい？」

窓から空を見る。

「うーん　3時くらいじゃない？」

「そろそろじゃねー？　出ようぜ外」

外に出ると、街の人数もかなり増えていてかなり歩きづらい

そんなときお城の前の大きな門が大きな音を立てて開き……　大きな声が聞こえる

「みなさん！これより勇者様の出発式を始めたいと思います！勇者様、とその仲間達の出発する歴史に残る日です！どうぞ盛大な拍手

を!！」

民衆がファーッと盛り上がり拍手喝さい

「うるせー、ちょっと人少ないところからみよっぜ」

「そっね、ここじゃよくみえないわ。 でどこで見える気?」

そう、この街はほとんど1〜2階建であり見渡せる場所はお城くらいなのである

「まかせろ」

そっいうと彼はなにやら呪文を唱えだす。

「魔法障壁!」

するといつもは板のような形状なのに今回は四角い感じになっている
徹夜で魔法がやばいとか意味わかんないこと言ってたけど、練習でもしてたのかな?

で、どっしろと?

「この上に乗るんだよっ」と

彼につられて上のほうにのる。 ……そして

「うおりゃああああ!」

正方形だった形の魔法障壁が縦に長く伸びていき、たちまち柱のようになっただ

周りから見ればなんか2人が10メートルくらいの空中に立ってるように見える

「っすごー！」

「どっやったの？ あんたいままでそんな使い方できてなかったでしょ」

「それがさ。こつちの世界きて応用しやすくなっただ。ってゆーか隠密使ってくれね？ 今のままじゃ変に目立つしさ」

「そっね」

隠密……とは、私が使う忍者スキルのうちの1つで自分の気配をものすごく薄くすることによって気づかれにくくなるのである。

っていうかこれわたししか効果ないじゃん

「あんたはどうすんのよ」

「オレ？ オレはこっするぞ」

そっいい唱えだす

「幻影魔法イリュージョン！」

もわーん という風にホタリンの姿が変形し……

「うーんそうだな……あ、あれでいいや」

遠くに飛んでいるワシのようなカラスのような鳥を指差し

「チェンジ！」

と、唱えると……ホタリンが鳥になった！！！！

「あんたそんなこともできんの!?!」

「この幻影魔法はプレイヤーvsプレイヤー戦でしか使わないから知らないよな。これはたとえばファイヤーボールを投げたとしてそれが相手には揺れて飛んでくるように見えるとかいう、まあ五感のうち視覚を惑わす魔法なんだが、こっちはすげえよなまったく、オレはまっちゃんよ?」

なんていうか、うん　すごいと思う……

幻影魔法で変身しようという考えがまず普通じゃないけど

コイツ実は頭がいいのかもしれない。

という大変失礼なことを考えていたのだが民衆が盛大の盛り上がりだしたので思考を放棄し、勇者のほうを見た。

世界について（後書き）

ちょっと世界について説明いれてみました。

ほかにわからない場所や説明してほしい場所がありましたら言っ
てくださいね

勇者について（前書き）

作者が暇すぎたので1日に2話目を投稿

そしてそろそろ他の人たちの話もかいてあげたいなーなんて

勇者について

ふむ、次はどこへいこうかな

僕はマカロニ

この前こっちの世界に落とされたみたいなんだよね

僕的にはこういう展開嫌いじゃないし、前あるネット小説ページに登録してちょうどこんな感じの物語を書いたこともある。

そしてここは西国ウイステラスのとある宿屋で状況整理。

最初の1日で武器や周りの街並みから文明の発達度を調べてみたけど、中世ヨーロッパ的印象だ。けどどうしても水洗トイレがあることだけは理解できなかった。

これは昔日本人が転生してきて文化を流した とでも考えるのが普通だよな

そして、このウイステラスは魔法が大変栄えている国であり、魔法の使えない僕はかなり珍しい存在だったらしくなにかと目立った。

あんまり目立つのは好きじゃないんだけどね

んで、ここじゃ目立つし、仲間も見つからないようだから他の街に引っ越そうと思っているところなのである

ギルドのクエストでモンスターの群れを一掃したらかなりお金がもらえたのでそこらへんの街の地図とか買って見たのだ。かなりの額

になるかと思ったが幸いこの世界には大きな国は4つしかないらしい。

うーん どうしよう

東国ジャッパーンはそこそこ田舎という情報を持っている。昔の日本みたいに田んぼとかあるのかなーとか勝手に印象を決めつける。

南国ハイワードは平和を愛する街とか聞いている。ここでもいいのだが、僕はこの前興味深い話を聞いた

うーむ

と悩んでいるところ

「北国アルデートが召喚魔法で勇者を召喚されたんだって！」

「いや、知らなかったのかよ！」

「悪いか！　しかしあの国も無茶するよなー」

という声が耳に入る。

勇者召喚？　そして無茶？　勇者召喚するのになんかデメリットでもあるのだろうか。

「こんにちは、すみませんがその話僕にも聞かせてくれますか？」

「おう、いいぜ。　北国アルデートにこの前勇者達が召喚されたのね。」

「え？ この前なの？」

さっきつっこまれてたほうが聞く

「ちょっとだまってる。お前がいると説明の邪魔になる」

つっこまれた青年が「わるい……」とブルーな感情を垂れ流しながら返事する

つていつか今さっき勇者『達』つて……

「てことは複数召喚されたつてことかい？」

「ああ、そのとおりだ。なんか知らないけど召喚魔法が暴発して、1人の予定が5人召喚されたらしいぜ」

暴発……

巻き込まれた人に心の中で「どんまい。」と言う

つていつかなにやってんだ アルデート。

そしてなんでそんな暴発するような国にまかせたんだ？

つて思ったから聞いてみる

「でもなんで召喚したのが他の国でもなくアルデートなんですか？」

「なんかな、召喚するための魔法陣はアルデートのごく一部の人し

か知らないらしい。1代目の勇者もアルデートで召喚されてるんだぜ」

「へえ、貴重な情報ありがとう。いろいろためになったよ。またどこかで」

「ああ、そっちもな」

彼らに礼を告げ、僕は再び地図を見つめる。

北国アルデート……ここから南国ハイワードと同じくらいの道か。まあこの際南国ハイワードに行くより北国アルデートにいったほうが何かありそうだ。

勇者召喚に興味を持ってホタリンあたりがいそうだし。

よし、決定だね

そう言っ僕はアルデートに向かって歩き出す。

脚に気をまとわせる。これでかなり早く動けるはずだ。

地図を持っているのでショートカットで一直線に進んでいた。正直10分でつくと思っていたがなんか1時間もかかっていた。

この地図、距離感おかしいのかもしれない。まあ買った店が店だったしなあ……

店を思い出す。

路上の横で布を地面に広げて、フリーマーケットみたいな感じで布の上に正座して物を置いていた

宝の地図　とか　死ぬまで生きられる壺　とか。

とりあえずついたことだけでもいいとしよう。

さて、門をくぐる

中に入ると、ウイステラスと人口密度がまるで違う。

当然か。　出発式真近だし

続いて周りの人の服装など

なるほど。文明はウイステラスとあんまり変わらない。

人の服装的に魔法使いとか戦士とか私服の人達が入り混じっていて自分のこの白い感じの服装でも目立たなそうので安心する

とりあえず街並みを見る。

続いて地図を眺め、何度か視線を街と地図の間を往復させる

買った店的にあまり信用できるものじゃないけど、一応さっきだつて街に着いたし、他に頼れる地図もないからしかたがない。

ここがここだとするとあれがここで……うむ

まっすぐいったところが宿屋か。

多すぎる人ごみを避けながら、宿屋を目指す。

人ごみはあまり好きになれないかな。っていうか好きな人のほうが珍しいよね

数分歩いていると宿に着く。

地図的には走って1時間書いてあるんだけどなー……

この地図、距離はめちゃくちゃだけど位置はだいたいあってるみたいだ

地図によると2階建てで木造な感じがいい感じで煙突がカッチョイイ宿屋なんだぜ！という説明が書いてある

なんだこのノリ感。嫌いじゃない

すると木造で2階建ての煙突が印象的な宿屋が見える。

煙はでていない。ご飯とかも作る時間帯じゃないからあたりまえだろう

カッチョイイかどうかは……

……。

中に入るとまず右側にカウンターのようなものがあり左側はちょっとした空間になっていてなんかロビーみたいだなと思った。

「あらいらっしやい」

カウンターからおばちゃんに話しかけられる

「どうもです、ここに泊まりたいんですけど、1日でだいたいどれくらいです?」

「1日銅1枚だよ」

ヤケに安いな……部屋とか結構ぼろいのかな?

ていうかそんな値段で赤字にならないのだろうか

「なんだい、泊まるか泊まらないかはつきりしな」

僕の思考はおばちゃんによって中断される。あまりの安さに固まってしまっていたようだ。

「すみません、泊まります。っていうかお安いですね」

「ああ、安さだけがうちの売りだからね」

その後部屋についての説明を聞く。

鍵を渡される。

「あなたの部屋は104号室だよ」

「ありがとうございます」

えつとこの廊下の向こう側がえーと……ああ、ここか
中に入ってみる。

まずは廊下。なかなか綺麗である。

進んだら広いリビングに出た。日当たりがいらしく窓からいい感じに日の光がさしこんでくる。

安さだけがとりえって言ったからボロいかと思ったけど全然大丈夫じゃないか

そしてベッドが4つ。

なんで4つ？ と思ったがここは城下町。クエストで疲れた戦士達もここに泊まるのだろう。

よく見たら武器立てなんかもあるし。

そして床はフローリング。

なんか小部屋があるから開けてみたらなかは和室だった

ってタタミ！？

なんかいろいろなところに和風な感じがあって和むのである。

やっぱり和風が一番じゃね？

今日も、疲れた。

別に移動しただけなんだけどね

そう思い窓から外を見る。

1階だから景色は微妙だった。

つていつか見える風景は広いとはいえないような広さの微妙な庭のみだ。

眺めるものつていうと……特にない。

しいていうなればてんと咲いている花の蜜を吸っている蝶を狙っているカマキリのような格好をしている虫のくらいである

それになんか結構空が暗くなっている

そのとき

「失礼します」

そういい、メイドのような服装をした女性がはいつてきた

そういえば夕飯時に食べ物届けるとか言ってたけど、それかな？
メニュー聞かれたからヘルシーなやつでお願いします っていつといた。僕はあんまり肉とか食べないんだよね。

とどいたのは食パンっぽいの（なんか五角形だった）と青いジャムみたいなやつが入っている容器と、サラダだった。

ヘルシーがいったっていったけど、これ朝食だよな？

10分ほどで食べ終わる

あー、食った気しねー

今日はもう寝ようかな……。

そう決意し、なんとなく早めに寝ようとした僕であった

はあ……

なんかあんまり眠れなかった……。

なんか物音が聞こえたから窓から顔を出して覗いてみた結果

何者かが地面を殴ったり突然前に吹っ飛んだりしていた

暗くて顔が見えなかったけどとりあえず危ない人には近づかないのが一番である。

結局朝まで続いていたから僕が寝たのは朝だ。

よし、こんどこそ寝る。

勇者の出発式に寝過ごさないだろうか。とも思ったが民衆の騒ぎ声でどうせ起こされるだろう

まあ今もすでにうるさいんだけどさ

だが、どっかの変人のせいではほとんど徹夜となってしまったマカロニは周りの民衆の声なんて気にもならなかった。

勇者について（後書き）

次回は戦闘回にしたいなーとか思ってみたり

波乱の出発式

「ふむ、もうすぐだな。魔物の数はどうだ？」

望遠鏡を見たままそう命令する

「はい、こちら準備OKです」

「うむ。流し込む場所間違えるなよ？」

あと少し……あと少しだ……！

「うむ、勇者殿。先代の勇者に恥じぬよう頑張ってくるんじゃぞ」

「ああ……。」

国王にそんなことを言われる

今日は出発式、魔王を倒しに行くためのな

……どうしてこうなった！

思いです

あー、なんかよくわからんがデート場所に彼女がなかなか来ないから待ってたら上から変な光線を食らった。UFO!?

かと思ったがちがうらしい。気が付いたら見たこともない場所이었다。というかどこだここ、ダ マ神殿？ そして周りには数名の魔術師らしき格好をしたものたちとじいさん1人

そして最初に聞いた言葉はというと……

「ようこそ、我が世界の救世主、勇者様。」

「は？」

ちょっと待て、この目の前のじいいが言うことからしてオレは世界を救う勇者様。つまり召喚されたってことか。いや、まて落ち着くんだオレおかしいこれは夢だ。

「なあ、殴ってくれ」

「ぶんっ！」

一瞬にして視界が暗転する

ってかいまこのじいい躊躇なく殴ったよな！ キれるよ！？ 俺キレちゃうよ！？

っーか痛えよ。やっぱり夢じゃねえのな。はあーもうめんどくせええええ

なんでおれやねん！

オレは生涯平和に生きるって誓ったのに！ 誰につて？お母さんにだ！ 今意外だとか言った奴でてこい！ぶん殴ってやらあ！

「おいこの野郎、元の世界に返しやがれっ!」

オレの問いに対して

「んなら魔王の首でも取って来い。元の世界に戻るにはそれがないと無理なんだってマジで」

あれ?こいつさっきまで敬語じゃなかった?なんでいきなりタメなの?ってというか魔王?なにそれおいしいの?ってというか

「どうしても倒さないとだめ?」

「うむ。」

オレにそれ以外の選択肢は無いらしい。

「大丈夫。お前みたいなのがあと4人くらいいるから」

はいまたきたタメ口!　ってというか他にも召喚されたヤツいるのかよ!

それから1カ月後に出発するからそれまでに特訓しておけとのこと。

はい回想終わり。

ったくめっちゃ理不尽じゃん?　オレかわいそうすぎる。っていうかだるっ

よし、早いところ魔王倒しちゃって帰ろうそして平和な日本に帰っ

てのんびり暮らそう。

そうしてオレはあいた門の真ん中にたち、静かに歩く

周りの民衆が「勇者様！」「魔王倒してください勇者様！」「きゃーかつこいいい！」などと口々に叫んでいる。うるさい。うるさい。うるさい。てまじ鼓膜破れたら慰謝料払えよ？

そして半ば途中まで歩いたところになにか鋭い気配を感じた。

「どうしたの？ケンジ」

うしろで不思議そうな顔をしているアリアに聞かれた。

アリアの他に魔法使いラング、刀使いムラサメと魔物使い（ビーストテイマー）リリカがオレの仲間として一緒に行動している。

こいつらも全員別世界から召喚されたとか。

召喚されすぎじゃね？ この世界。つーか自分の世界の問題くらい自分の世界で解決しろし！

まあそれはともかく、お互い理不尽にも召喚されたもの同士、話もあうし、こつちの世界で唯一楽しい時間を過ごせる仲間達だった。オレにとって心の支え的なもんだな

「ねえ、きいてる？」

「ああ、わりい。むこう側に何か感じるんだよ。ほら、ちょうどあそこらへん」

前方を指差す

次の瞬間、その空間が裂けた。

は？ いや自分でいっててなんだが、なんだそりゃ

だがたしかに避けている。まるで口のように。

その口がどんどん広がっていく。につれて中から膨大な魔力を感じる。なにか、魔物の群れがこっちに突進しているような感覚が…。

「おい……くるぞ！」

空間の口が大きくなり大きくなり……やっと成長が止まる

直径100メートルほどの円状の口。中身は真っ黒くて見えない。不気味だ。

次の瞬間……恐ろしい数の魔物がなだれ込んできた。

は？ちょっとまてよ

「ケンジ！」

気づいた時には魔物の群れに突っ込んでいた。

このままじゃ周りの民衆が巻き込まれて死ぬ。オレはこの世界のことはどうなってもいいけど、目の前で大勢の人が死ぬなんて光景は

絶対に見たくない。なにその矛盾。いや今はんなこたあどうでもいい。それに止められるなら止めたい！ あれ、オレ案外いい奴？
なんちつて

群れにむかって剣を水平にふりつつ叫ぶ

「輝け！ Xカリバー！！！」

魔剣Xカリバー どうかでいいことあるような名前だ。

このXカリバーは王家の家宝とかって聞いたけど性能はすっげえことになってる。

名前叫んで振ると光の刃が飛んでいく。そして破壊力はなんていうか、パネエー

そんなわけでオレの剣の刀身が一瞬光り、巨大な斬撃が群れへ吸い込まれて、大爆発を起こす。

それでも群れはこちらになだれ込んでくる。だからオレは剣を振る。振る。そして振る。

だが、どれだけなぎはらっても魔物の数が多すぎて流れ込んでくる後は民衆。流れ込ませないようにめっちゃくちゃに斬撃を放つが、あまりにも数が多すぎた。

6割ほど後側に流れていくのを横目で見つつ、オレはもっと修行を真面目にしとけばよかったと後悔した

「え、なにがそんなに悪いの？」

コロネが聞いてくる。

「なんたつて見てみるよ。出口をふせぐように口が開いてやがる。この街見たところあの出口意外は出口がないからいまこの街の民衆は逃げ場がねえ。つまりふくろのねずみってやつだ。」

「なるほど……」

「とりあえず、今はなだれ込むのを止めるしかないな。あの勇者御一行達だけじゃ無理だろ」

と、勇者達を見ながら言う。

どうやら5人組らしい。

勇者っぽいのが光の眩しい斬撃をめちゃくちゃに放ち、サムライのような人がすんげえスピードで舞うように敵を蹴散らしつつ、魔法使いが炎魔法を使いながら戦っている。あともう一人魔法使いっぽい人が素手で殴っている。補助魔法使いか？

だがそれでも魔物の数が多すぎて3割ほど倒しきれなくて、民衆を襲っている。

だがあれだけの量を7割も倒しているなんてさすがだ

オレはコロネと一緒にその流れ込んでいる場所に降り立つ

「おいおめえらあぶねえぞ！さがってる！」

なんか勇者っぽいヤツに怒鳴られる。なかなかのイケメン。死ねばいいのに

「うるせー！オレらがお前らの取り残した分倒してやるっつってんだよ！」

「ふっ、死んでもしらねえぞ赤髪！」

そついい勇者の野郎は再び群れの中に突っ込んでいき光の斬撃を放ちなぎ倒す。

とりあえず役割分担である

「コロネ、あっち側を頼む。オレはこっちやつから」

「うん、わかったわ。無茶しないでよね！」

そついいコロネがむこうがわへ消えていく。

さあーで、久々に本気で戦いますか！

敵軍を見る

何やらオオカミっぽいものやらブタっぽいものやらイノシシっぽいものやらシカっぽいものやらライオンっぽいものが入り混じった群れである。

まず魔法障壁を両腕を囲む形で展開し筋力上昇の補助魔法で運動能力を上げる

そして群れに飛び込む

真正面のイノシシっぽいのを殴り飛ばす。イノシシっぽい顔面が砕けて血しぶきがあがる

ぐろっ。

だが我慢だ。

左側のやつに左アッパーを食らわしつつ、右側から襲いかかってくるトラっぽいやつひっかき攻撃をかわし右ストレートをプレゼントする。

殴り、見切り、殴り飛ばしてよける。

そんな動作を繰り返す。

だが数は一向に減らない。　というかむしろこっちの残滅速度が遅すぎてむしろ増えているようだ

「く……おおすぎるって」

こうなったら昨晚必死で考えた“合成魔法”とやらを使うしかないようだ

「冰雪魔法アイスロック！」

地面に腕を当てて技名を叫ぶ

オレの手が触れた場所からどんどん地面が凍っていき、魔物達の脚をとらえる。

半径50メートルほどの敵軍が動かなくなる

続いて

「岩石魔法サモンロック！」

空中100メートル付近に直径10メートルくらいの巨大な岩石が召喚される。

これはゲーム内ではいわおとしみみたいな感じでしか使えなかった。まあ今もあんまりかわんないけど

そして

「火炎魔法フレイムベール！」

これは対象を炎に包んで火だるまにするというもの。ゲーム内では相手の体力をジリジリ減らすものだったが今回の目的はそれではない。

岩石に向けて発動し、空中の浮遊物は赤く燃え盛る

「重力魔法グラビトン！」

その岩石にだけ重力の力を10倍ちよつとかける。

重力魔法は範囲が狭いほうが集中するから対象1つくらいなら10

だが魔物の群れはまだ出てくる。もっと倒さなければ……

「はあああああああ……！」

体中の魔力をみなぎらせる

「水魔法ウォーターエクスペローション！」

呪文を叫んだと同時にオレの前方に横長の全長10メートルはあるうかという魔法陣が表れてそこからハンパない量の水が流れ出ていく。

前方の敵がみるみるうちに爆発的に召喚された水に飲み込まれていく。

だがそれだけでは終わらない

「電撃魔法サンダーエレクトリックショック」

前方に向かって雷にもたすぎましい電圧を持った光の光線をうちこむ

それが水流に触れた瞬間

バチッ！という音とともに

目の前の光景が爆発的な光によって遮られ……

つづいて炸裂音

つまりこうだ

水魔法ウォーターエクスポーションは簡単に言うと水流を爆発的に作り出すことができ、前方ほぼ全部を範囲として水で飲み込むことができるが、実際そこまで攻撃力が高いわけではない

そこでオレは電撃魔法サンダーエレクトリックショックを発動したのだ。

これは敵単体にすぎましい電撃を浴びせるというものだから当然全体攻撃には使えない。

この2つを合わせることで水流に電流が走り広範囲に電撃を浴びせることを可能にしたのだ。

そして光がやみ、目を開けるとそこには……

あたり一面黒コゲになった魔物達が転がっていた。

よし、なかなかの効果だな

恐るべし、合体魔法。

だがこんどは口のような空間からプテラノドンのような巨大なトリの魔物が100匹ほどこちらに飛んでくる

空中か……厄介だな

「重力魔法グラビトン！」

3倍ほどの重力をかけて、動きを鈍らせた後

「結界魔法バウンズオブガーケレッドプリース！」

結界魔法バウンズオブガーケレッドプリース。広範囲を囲むのに便利な上、外と中の魔法的干渉を一切うけいれない

つまり内側からビームとか出しても届かないし外側から破壊光線とか食らっても届かない

それでトリの魔物を正方形の透明な空間に閉じ込める。

魔力が持たいたないのでグラビトンを解除

だがこれは結界魔法。自分達の身を守るための魔法である。

なんで敵を囲むかって？まあみてみるよ

そのバウンズオブガーケレッドプリースで鳥の群れを囲み……

「火炎魔法ザ フレイム……からの重力魔法ザ ブラックホール！」

火炎魔法ザ フレイム これはある一点にマグマにも近いほどの高温の炎を召喚することができる魔法である。ちなみにザ というシンプルかつTHEがつく魔法は超上級魔法であり威力も消費魔力も半端なかったりする

その超高温の炎を結界空間の中心に召喚する

え、あの結界は外と中の魔法的干渉を受け付けないんじゃないのか

って？

それは結界にぶちあたって無効化されたときの話だから問題ない

中の酸素奪って殺す……わけではない。

それでもいいけどそれじゃ時間がかかるだろう。

だから、重力魔法を唱えた。

こっちの世界じゃ初めて使うこの重力魔法が ブラックホールはその空間全てのものを中心にもすごい引力で引き寄せるといったものである

そしてその圧力に負けた結界は無理やり心中に圧縮され小さくなっていくにつれて、中で勢いよく燃える高温の炎はいきおいを増していく。

空間が圧縮されていくにつれて空間内の酸素濃度が飛躍的に上昇するからである。

そしてその結界が限界まで収縮した直後……

今回3度目の大爆発

爆風が砂埃を起こすが魔法障壁で防ぐ。

やったか……？

砂煙が落ち着き、さっきまで空中を飛んでいた魔物達はあとかたも

なく消し飛んでいる。

よっし！ これもイイ！

「うう……」

その時、視界が一瞬ブラックアウトする

軽いめまい、か。

……魔力、使いすぎたか。

まああんだだけ上級魔法を連続で使えばそらそうなるだろうな。

亜空の口を見る。

ちょうどその時魔物の群れが途絶えた。いや、流れ出るのが止まった

やっと、か

左側を見る。

5人の勇者含む人たちがなかなかの連携プレイで戦っている。さすがだ

右側を見る

ころねも頑張ってるじゃんすげえすげえ

あと少しだ！

だがもう上級魔法を行使するほどの魔力はなさそうだ

しかたない……

自分の両腕を魔法障壁で囲み……

「冰雪魔法アイスフォーム」

魔法障壁で包まれた自分の腕を凍らせる

このアイスフォームとは下級魔法で、氷の刃っぽいのを作れるんだ
がこっちでは結構自由がきく

だからオレは目をつむりイメージする

長く、鋭い、氷の刃を

目を開ける。

オレの両腕はヒジから先が氷におおわれていて、ちょうど手首から
先が鋭い氷の刀のようになっていた……

そして……！

全身の筋肉強化の補助魔法を発動

これは魔法使いが接近戦をするときに役立つ数少ない魔法の1つで
ある

「うう……」

やばい、こんなに魔力使ったの初めてだ。ぶったおれそう。

だがそんな弱音を頭の外へ押しやり群れに単身で突っ込んでいく。

前方に飛びかかってくるイノシシっぽいのを左の刃で下から斬り上げ、続いて刀を上から振り下ろして上から飛びかかってきたイヌっぽいのを両断する。そして流れるように右の剣で横にいるやつを薙ぎ払う。

双剣はあんまり使い方は慣れていないが、リサの剣さばきを思い出して必死に見よう見まねで切り刻む。

上から下へ、右から左へ、流れるような攻撃を意識する

だが意識が朦朧としだしてきた

くそ！あとちよつとなのに！

「うおるあーららららあああ」

最後のラストスパートをかけるように両方の剣を振りまくる。

目の前の敵の動きがゆっくりに見えてくる

思考が加速していく。

攻撃を避け、ときには受け流し、時には迎えうちながらスキをついて刀身で切りさく

だんだん他のことが考えられなくなっていく

もうすでに魔物の姿しか視界には映っていない

あと少し……あと少しで……

ここから先の記憶は残っていない。

波乱の出發式（後書き）

テスト期間突入なう。

あー。

仲間との再会（前書き）

えーっと戦闘続きになりました

戦闘とか読み飛ばす派のみなさまがた申し訳ありません…。

たがり剣を振るう女の人と目にも止まらぬ速さで刀を振るう剣士と魔物をばんばん倒しつつ魔法使いの格好をしている男性が殴ったりけったりの肉弾戦をしている。

それでも約3割ほど残っている

だがその残った魔物が街を破壊……しているわけではない

さらによく見ると2人の男女が戦っている

あーもう、遠すぎて見えない。視力落ちたかな？

バッグからウイステラスで買った双眼鏡を取り出し、覗く

そして思わず

「ホタリン！？ そしてもう一人はコロネ！」

と声をあげてしまう

ホタリンは今まで見せたこともないような魔法を使いながら群れを一網打尽している

コロネは鎖手裏剣を巧みに操ってなぎ倒していく。

だが、二人ともかなり必死に見える

このままじゃいつまでもつか……

「よしー！」

僕は決意する

あの二人に加勢すると。

むこうはほたりに任せてわたしはこっちをする

うわーすごい数

両腕にナイフを構える

そして群れの中へ

イノシシとかブタとかそんなに強そうではない魔物の集まりのようだ

イノシシの腹にナイフを突き刺し、引き抜きつつもう片方のナイフで横からくるブタの首を切る

あまり強くない。っていうか余裕だ。しかし数が……

「秘剣 鎖手裏剣」

わたしの発言で腕に直径2メートルほどの手裏剣が召喚される

これはただのブーメラン式の手裏剣とは違い、鎖に魔力を送ることで微調整ができるようになってる。

それを右手でもち、後に大きく引き、前に投げる

巨大な手裏剣が回転しながら敵をなぎ倒しながら途中でゆっくり曲線を描くようにカーブする

そして鎖に若干の魔力を

回転速度上昇。次におおきく回りながら戻ってくるように軌道をイメージしつつ流す

すると鎖手裏剣は送った命令に従うようにカーブに入ったところから回転速度が上昇し、カメのような魔物を切り裂く

そう、回転速度を上昇させたのは途中でこのカメのような魔物ではじかれたときにそこで攻撃が止まってしまつのを防ぐためである

鎖手裏剣は広範囲に複雑な攻撃を仕掛けることができることから一見広範囲の敵を倒すのに便利なように思えるがそれはちがう

硬すぎる敵がいた場合そこではじかれると終わりなのだ

はじかれた場合は鎖を引いて戻すことになり、とりに行くのにかなりめんどくさい

そしてなにごともなく敵を切り裂きなぎ倒しつつ自分の所に戻ってくる

そのとき、後に何かの気配を感じ戻ってきた手裏剣を手にとらずひよい、とよける

後から断絶魔の声

人ではない、獣である

なるほど、前方に攻撃してるところを見て後にスキがあるとみたよ
うだ

だが残念である。わたしが手裏剣をよけたことによりその巨大な刃
が魔物の腹に突き刺さり、血しぶきを上げつつ地面に鎖手裏剣ごと
突き刺さる

どうやら後にも注意しないといけないようね……

前を見る

うわー

まだ全然減っていない。っていうかペースが遅すぎてむしろ増えて
る？

よし、使うしかない

「盗賊スキル影分身」

ニンツと腕を合わせる

自分の影のような分身がわたしから黒いカゲの分身体が出現

そして真っ黒だった影にだんだんと色がやどり……わたしそっくり
になる

このスキルは覚えたばかりのところ2人が限界な上、分身が黒いシークレット状態で、プレーヤーvsプレーヤー戦で簡単に見分けられてあんまり使えなかったっけ

だがいまではこのとおり、分身がそっくりさんである

それに10人程度なら簡単に操れるようになってる。

さて、分身でもしたことだし、やるか。と両腕にナイフをもちながら思う

最初のように前方に上段からの斬りつけ、左手の逆手にもったナイフで左から右に一閃に薙ぎ払う

下から右手のナイフでナナメに斬りつける。

目の前にライオンのようなものが突進してくる。

わたし一人ならナイフで防ぎようもないわけで吹っ飛ばされる未来が待っている

だがいまは私以外にもいる

視界の左端からものすごい勢いで巨大な手裏剣が回転しつつ飛んできてライオンを2分割する

ちなみに今のは鎖手裏剣よりすこし弱いブーメラン型手裏剣である

こういう分身戦では鎖を使うと絡まったりして邪魔になるから使わないことにしている。

そして分割されたライオンを無視し、また横からきたのを切り裂く
そうして10人ほどのコロネたちは次々と魔物の集団をなぎ倒して
ゆく

弱い魔物達を倒しながら亜空間を見やる

わき出てくるザコい魔物達はホタリンのほうに流れ込んで行っ
てい

なんでだろう

ホタリンあの数大丈夫かな……

あいつ集団相手は苦手だぜーとか言ってたけど

と、思いホタリンのほうを見る

すると……

「はあああああああ………！」

と、まるで体中に魔力でもみなぎらせているのかと思わせるような
雄たけび

そして……

「水魔法ウォーターエクスペーション！」

あのドラゴン達はさっきの魔物のように簡単にいかないだろう

一度分身を解いて様子を見よう

と、分身を解除する。まわりの分身たちがスウ……と音を立てずに消えていく

そのとき、ドラゴンの口にかすかな光が……

火炎ブレス！？

というわたしの予想は外れた

ギユウウウーン

ほっぺたを光がかする

続いて後方で

ダアアアアアアアン！！！！

え、今光線吐いたの！？

まずい、火炎ブレスならある程度よけられるけど光線は出が早すぎるから口が開いた瞬間によけるしかない

それをこんなたくさん……

「あーもうー！」

右側で小さいドラゴンが口を若干光らせて口をあける

急いで後へ回避

さっきまで私がいたところに光線が直撃して爆発を起こす。

続いて上を見るとすでに口を開けた小さいドラゴンが……

まずい！

目をつぶる。

食らった。そう思った。が、そうならなかった

なぜか。それは……

「あぶないところだったねコロネ」

彼が防いでくれたからである。

「え、マカロニさん！　なんでここに！」

「話はあとでだよ。とりあえずこの小さいの片づけなきゃね」

そついいマカロニさんが攻撃力上昇魔法を発動したのか全身を青いオーラに包ませる

そして腕を天にかざし、叫ぶ

「来い！ 爆剣エクスプロージョン」

彼の手がいきなり出現した灼熱の炎に包まれてそれがどンドン形をかえ……炎がじゅわつと音を立てて消える

腕には刀身がギザギザな形をした攻撃的な印象の全体的に赤い色をした剣が収まっている

「危ないから離れて」

そしてマカロニさんが技名を叫ぶ

「ウェーブショックインパクト！」

剣を逆手に持ち地面に突き刺す

スウー……と周りに空気の揺れを波紋状に広げ

小さいドラゴンだけが何か巨大なハンマーでホームランされたかのごとき勢いで吹っ飛んでいく。

その小さいドラゴン達の目は今何が起こったのか理解を求めている
吹き飛ばされたあとマカロニさんを中心に半径10メートル地点の
地面に激突し、体が半分ほど埋まる。

これは彼の得意としている物理範囲攻撃の上級スキルで、何度も連続して使うことができないらしい。

そして、攻撃対象を指定することができる

彼がこの技を選んだのはきつと私を巻き込まないためだろう。

つと、危ない危ない。爆風で後に飛ばされるところだった。

ふと、マカロニさんを見る

なにやらまだ何かするようだ。

地面に剣の先っぽを突き刺したまま叫ぶ

「はじける！ エクスプロージョン！」

と、突然地面の下から重低音が響き……

マカロニさんを中心に半径10メートルほど、ちょうど小さいドラゴン達が埋まったところらへんを中心に轟音とともに爆発

え、なにあの技。 わたしみたことない。

と心の中で呟いたはずだが心を読んだのか彼が口を開く

「これはこの剣の特殊効果。半径10メートル地点しか攻撃できないから使いにくいしあまり知られてないんだよ。だから使うの初めてだなあ」

という説明を聞いてなるほど。と思った。そもそもマカロニさんの技は インパクト で統一されてる気がする

という思考は

ギシャアアアアアア

という怒りと悲しみを含んだ大きな黒いドラゴンの咆哮により中断される。

仲間だけで行けると踏んだが予想外の展開によって全滅したことが気に食わないらしい

そりゃそうだよな

っていうかむしろ一斉に来てくれなくてよかった。

最初から全員でかかってきてたらわたしやられてたよ。

そしてドラゴンが口を開き、かすかに輝く……。

まさかこのドラゴンも光線……！？

「あぶない！ マカロニさん！」

「え……」

と叫んだころには光線が吐かれていた

さすがの反射神経で体を少し傾ける

初見で回避するなんて、すごい

光線がマカロニさんの左肩を貸すって後方の建物へ激突

刃が回転しつつ翼の膜にあた……りそんなところで体を半回転させよけられる。

鎖に魔力を注ぎ込み、その場で円を描くようにあやつり再度攻撃

その場で空中旋回　そして起動を下にずらしながら回転速度上昇

ガッン！

ドラゴンのアバラ部分にあたり、数枚の鱗が破片を飛び散らして墮ちてゆく

振り返りながらドラゴンが爪の鋭い腕をわたしにむかって振り下ろす

体を少し横にずらし、ギリギリでよけて常時ポケットにいれてあるクナイで腹の部分を突き刺す

だがクナイが折れる。

はやりこの程度じゃ突き破れないか

つづいてドラゴンが腕を振りまわした勢いを殺さず生かしてシッポでわたしをたたきつけようとしならせる

これは……あたるかもしれない

と思ったが視界の端にマカロニさんの姿をとらえる

「シヨックインパクト！」

と叫びつつハルバードを右から左にフルスイングしシッポが交わる。

ドアアアアアアン

発生した高圧度のエネルギーが逃げ場を求めて回りに飛散する

ものすごい爆風とともにわたしはマカロニさんとドラゴンから距離を取る

シッポを戻し、口を開く

マカロニさんはスキル発動後の硬直で動けない

やばい！

「召喚 旋空手裏剣！」

龍の口部分に間に合いますようにと天に祈りをささげつつ手裏剣を投げて……

口部分にあたり光線の軌道がわずかにそれ、マカロニさんへの直撃をまぬがれた

「たすかったよ……」

「お互いさまでしょ」

だがしかし、これ以上続くといつか光線をもろに食らうだろう

「よし……」

その時マカロニさんがなにか決心したように言う

「いまからどこでもいいから集中攻撃してくれない？」

「え？」

「次の技で仕留めるから。……はあああああああああ！」

そういい、全身に力を溜めこむマカロニさん

とりあえず特に打開策もないので言うとおりにする

ドラゴンにかけよる

わざとスキの多いモーションでクナイを投げるふりをして攻撃をさそう

予想通りにツメで切り裂こうとする

それをひょい、とバックステップでよけて発動する

「盗賊スキル影分身」

スウーと10人ほどの分身を作り、それぞれクナイや手裏剣を持たせてわたしは旋空手裏剣を手にもつ

よけられたあとのスキだらけのドラゴンの一番攻撃しやすい場所に攻撃をうちこむつもりだ

右腕を大きく振りおろしている格好で、今こちらに右肩がむき出し
になっている

あそこだ！

分身達を使い、手裏剣やクナイを一斉に投げる

一点集中である

ガガガガガツンガンガツグサツグサグサグサ

前半の数個の手裏剣ははじかれたものの、その後のクナイで鱗がは
がれおち、最後に投げたわたしの旋空手裏剣で完全に皮膚がたちき
れて血が流れ出る。

「おっけい！ マカロニさん！」

「わかった！」

マカロニさんが後からこっちに走ってくるのをみやりつつドラゴン
を見ると

ギシャアアアアアアアア

と叫びながら口に光がとまり……

熱い熱戦が吐かれる。わたしの左胸を狙って

わたしの心臓部を貫く……という未来はこない。

爆風

ドラゴンの血まみれの右肩にハルバードが接触
半ばまで突き刺さったところで切れなくなった

が、勢いは止まらない

ハルバードが威力をました

おそらく魔力を流したのだろう

再びすごい力でおされるドラゴン

地面に放射線状にヒビが入り

ドラゴンの脚元が陥没する

周りの地面が割れ、ところどころ隆起し……

大爆発！

……

静寂

砂煙がはれる

そこに満足げな笑顔でハルバードを肩に担いだマカロニさんと壮大
にへこんだ地面の中心に無残にも屍と化したドラゴンだけがのこっ

ていた。

もどる平和（前書き）

全開は作者が戦闘に暑くなりすぎて街のほづの情景描写がすっかりぬけてましたね

っついで今回事のしおせておきます

もどる平和

「ほう、なかなかじゃの……」

「そうですね」

隣で金色の髪に透き通るような白い肌の持ち主のセイラが頷く

わしの秘書で天使じゃ

「わしのいったとおりじゃろ？」

「そうですね……」

今2人で街の状況を映像で観察しているところなのじゃが

突然魔物が流れ込んできている

セイラを出勤させようか、とも思ったが大丈夫のようじゃ

5人の勇者たちにも驚いた

が、わしはわしが送り出したヤツらに注目した

あの赤髪の少年が次々と魔法を合体、合成させて新しい魔法を行使している

わしが黒い龍で最初に試したときはあまり活躍してないように見えるが

どうやらあの少年はオールマイティみたいじゃの

そしてその横のほうでニット帽の少年とポニーテールの少女がドラゴンと闘っているのが見える

あのニット帽の少年は最初の戦闘でかなり活躍しておったな。

少女のほうも変わった武器を器用にあやつって戦っている

魔物の群れ、それもあれだけの数が流れ込んでいるのにもかかわらず、ほとんど民衆のほうに到着するまでに倒されている。

いくら5人の勇者たちが前で戦っているとはいえ、簡単なことでもないだろう

赤髪達の後に運よくたどり着いた魔物はギルドの冒険者らしきおっさん達が武器で倒している

一方戦力にならない一般市民はというと彼らの後側に避難し

口々に応援しているようだった。

「うおおお魔物だああ!」「ブツ殺せええええええ」「がんばれお兄ちゃん達!」「あ、ニキビつぶれた」

ほっほ、もはや英雄扱いじゃの

がんばれがんばれ

おお？ 群れの勢いがようやく途絶えてきたようじゃ
彼らならなんとかやってくれそうじゃ。

目が覚める

ここは……

オレはたしか出発式を見ていて魔物の群れが……

そうだ、オレは戦っていた

だがいままでオレは寝ていた……え？

周りを見る。オレとコロネが泊っていた宿である。

そのとき、玄関から直接つながっているはずの廊下とリビングを仕切っている扉がひらく

「目が覚めたのねホタリン」

「ん、オレ戦ってなかった？ え、夢オチ？」

「ちがうわよ！ あんたが魔物の群れを倒しきった後力尽きたように倒れたのよ！ 心配したんだからね！」

そういわれてみれば、と思う

魔力使いすぎて吐きそうになって、氷魔法で作った両剣で戦って……

……そこまでしかおもいだせねー

まあ、疲れてたんだろう

思考を放棄する

「ああ、心配してくれてサンキューな」

「うん。生きてたならよかったんだけどね」

ニコ と笑う

だからオレも親指をグツとつきだして笑う

そのとき誰だかしらないがもう一人入ってくる気配を感じたので扉のほうを振り向く

「やあ、目が覚めたようだね」

え、え？

「マカロニさん！　なんでここに……！」

驚いた

そりゃ、おどろくよ？　普通

生き別れになった兄弟が何事もなかったようにただいまーって言う

てくるようなものだぜ

「ウイステラスで勇者出発式なんていう興味深いイベントがあるっ
てきたからね。他に行くあてもないし寄ってみただけど、なん
かすごいことになったね」

なるほど、彼も彼でがんばってたんだな

それに、すごいことになった ということについては同意である

っていつかあの群れなんだったんだ？

と思ったから聞く

「ああ、予想外だったよな。っていつかいきなり空間が避けて魔物
の群れが滝のように流れてくるとか意味わかんねえ」

「そうね……勇者の出発を狙ったようなタイミングだったわよね」

コロネがつけたす

「うーん……街の人たちにも聞いた通りだね」

と、マカロニさんが意味ありげににやける

「なんか、しつてたりすんのか？」

「魔王がいるのは知ってる？」

突然マカロニさんに質問される

「うん、知ってるわよ」

「え、まじかよ」

あれ？ 知らなかったのオレだけ？

「僕的に魔王のしわざかなあって思うんだよね」

「でも、なんであのタイミングでやったのかしら」

それもそうだよな

「手荒い挨拶……とかだったら笑えねえよな」

「あははは、そうだね」

うん、なに笑いながら同意しちゃってんだマカロニさん

「まあ何はともあれ、終わって良かった……わたし死ぬかと思ったもん」

とコロネがほっとしたようにいう

「あのドラゴンつよかったよね。でもホタリンもよくあの数倒せたね」

「え？」

マカロニさんがドラゴンなんていうから気になる

「途中からこっちにドラゴンが来て、そのほかの魔物が全部そっち
いったのよ」

あーそういわれれば、なんか途中から数が増えたような……

でも今そう言われるまで気づかなかった……

「ってまじかよ!!!」

「あんたの闘い方じゃ気づかないかもしれないわね……」

そんな感じで久しぶりに会ったマカロニさんとコロネと楽しく談笑
をしていたらドアをノックする音

「失礼します」とメイドさんばい人が入ってくる

そして3人分の食事が皿にのっている

あれ？　ここって2人登録じゃなかったっけ？

「僕が頼んどいたんだよ。　僕の方は隣の部屋に持って着といてね
ってね」

え？　となり？

「どっぴいっぴいっ」と」

とコロネもきく

「ここは105号室だよ。僕もこの街で宿をとっていたんだけど、たまたま同じ宿でさらに偶然にも104号室でお隣さんだったんだよ。」

笑顔でさらっという

いや、なにその確率！　すげえ！　超すげえ！　ワァーイ

3人で食事をすませ、さあ暇だどうしようかと考えていたところ、ちょうど手持ちの金がそろそろ少なくなってきたのを思い出し

「そっだ、なんかクエストいかな？　金がやばいんだよオレら」

と提案する

「ほんとだわ……」

サイフをのぞきつつ100円玉かと思っていた金が実は50円玉だったときのよ様な複雑な顔をしながらつぶやくコロネ

「じゃあ決まりだね」

という事でギルドに向かうことになった

「おおお！　英雄達が入ってきたぞおおおおおおおお！」

入った瞬間そんな声が炸裂した

ギルド内の冒険者たちが一斉に振り向く

「え？ 英雄？ なんじゃそりゃ」

「とぼけんなよ兄ちゃん！」

がっちりとした肉体に重そうな鎧を着けたスキンヘッドの屈強そうなおっさんという

「あんたたちの活躍っぷりすごかったぜ！ あんたらものんでけよ
！！！！」

「おうおうおう！ お前らものめ！」

とかいいながらビールのようなものをさしだされる

え、オレ未成年なんすけど。ってこっちじゃ関係ないか

それに、なんか楽しそう！

後を見やる

コロネが仕方ないわね。とでもいうような顔をし

「あはは、いいんじゃない？」

とマカロニさんも笑う

よしそんなじゃあ飲みますかア！

イエーイ！

飲み明かした後マカロニさんにお金を借りたのはいうまでもない

もどる平和（後書き）

次話からアルスラへんを描いていききたいと思います

俺達の初日（前書き）

今回からはアルスの番です

俺達の初日

ここは……どこだろう。周りを見る。森のような場所、いや森だ。北の森とは違う。熱帯に生えるような植物が生えている上、木の形が北の森のそれとはそれとなくちがう。と感じる。

そして気づく。いま自分は森の中に投げ出されている。それはいい。だがしかしこの感覚はなんなのだろう。それになんだか胸が窮屈だ。まるでゲームに吸い込まれたようなこの感覚。いまだきこんなこと起こるはずない。と思っていたのだが、まさかな……。

腕を見る。

ゲームのキャラクターが装備していた闇色鋼ノ鎧シリーズである。ほかのステータスが下がるかわりに自分の防御力にその数字の数をプラスさせることができるこの鎧は自分にぴったりの能力だ。

最初の初心者だったところによくわからないまま振り分けて当時防御になんか全然ふっていなかったな。

だがそんなことはどうでもいい。まずはこの状況を抜け出さないといけない

簡潔にまとめるとこういうことになる

森の中に1人 ゲームキャラクターの姿になっている 地図もない

仲間もいない

……。

選択肢としては - - - - -

1 このまま森で生活する

2 このまままっすぐ歩き、森をでる

3 適当に歩いて、出会った人に道を聞く

さて、と思う。

1 番の森で生活する。は悪くないと思う。思うがこの状況は速く仲間にあっただほうがいいと思う。それに森で暮らすには食料や飲み水、雨風を防ぐ場所。いわば洞窟のような場所が必要となる。

1番は没とする。

2番のまっすぐ歩く。はどうしようか。まっすぐ歩いていけば森は出られると思うが自分の脚ではどれだけかかるかわからない。リサヤコロネのように素早ければその方法でもいいのだが……

だが3番も望みの薄い選択肢である。こんな森の中に人なんているのだろうか。いてもきこりや魔物を退治（これは低確率）しにきた冒険者くらいだと思われる。

まっすぐ進んでいるうちに人にあうかもしれない。

そうして自分は最良の選択を選ぶことにする。いつまでもこんなところにはダメだ。行動しなければならぬ。この場所へのこつてうずくまるなど愚の骨頂なのだ。

適当に歩く場所を決め、歩く。

歩いていると林檎のような果物がぶら下がっている木があった。とりあえず大事な食料として確保するのが普通。ということでの木まで歩き、取ろうと手にかけたとき

「グルルルルル………」

なにやら獣のうなるような声が聞こえる。なわばりにでも入ってしまったのだろうか？ その獣を見る。オオカミのような魔物だった。オオカミは総勢4匹のあまり多くは無いが一匹の時より確実に厄介な数で自分を囲み威嚇している。

このまま別に無抵抗でも無傷のままでもいられそうであるがそこになつている林檎は硬いわけではない。俺は林檎を守るべくオオカミを退治することに決めた

「武装解除 グレイトシールド」

自分の巨大な盾が光に包まれて……消滅する

俺が装備している盾の能力は自分の攻撃力をほぼ0まで下げてしま
う代わりに、ほかの盾よりも桁違いの防御力を発揮してくれる。最
初らへんに少し上げてしまつて後悔した攻撃力を無駄にしたくない
俺のための武器といつても過言ではない。

そして盾を解除したことにより消えていた攻撃力が戻る

といつても攻撃力に自信をもてるといつたら嘘になるだろう。

それにこれといつて使える武器など持ち合わせていない。1つだけ
持っているがそれは緊急時以外使うことは無いだろう。

だから素手で殴る

「……………！」

バゴン！

オオカミAが飛びかかってきたのでかまわず頭部を殴る。そしてへ
こむようなつぶれるような感覚が腕を伝わってくる

ゲーム中では簡単に殺していたが、いざ素手で殴り潰すとするとか
なりいやな感触が伝わってくる。吐きそつだ。だがオオカミは俺に
吐く暇すら与えてくれないようだ

後から気配……

気づいた時には頭部をオオカミにくわえられていた

普通の人が見たならかなりホラー&グロテスクなジャンルの1つとして怖がられるような光景であるが、しかし。そんなやわ

な攻撃、痛いどころかかゆくもない

頭元で何か硬いものが碎けるような音がする

オオカミの歯が碎けたのか。と俺は無意識のうちにそう思う

ふりかえり左腕を振りかぶり、殴る

オオカミがすごい勢いで吹っ飛び、木にぶつかり木片が吹き飛ぶ

絶命。

ちら とほかのオオカミを見やる。おびえている。仲間2人が死んだ上攻撃がきかない以上俺はおびえられる対象でしかないだろう。

オオカミ2匹は覚えてるよ！ とでもいいたそうにワンワン！ と犬のように吠えて逃げていく

まるで負け犬の遠吠えだな。

フフフツ……と。我ながらうまいことを言ったことにすこし笑ってしまう。俺のツボは自分でもよくわからないなと思う。自分のことなのに自分でもわからないとは変な感じだ。さて、林檎を取るか

そのとき そういえば、とあることを思い出す。ゲーム内で使っていたアイテムポーチの性能はそのまま使えるのだろうか。使えたら嬉しい限りのことだ。なんせ1つのアイテムを999こしまえらうえ50種類もしまえるのだから最大収納数は999を1000として考えて1000×50＝50000となりそれから最後に999から1000にしたときの1を引き……

49950も収納できることになる。

小さい上に収納スペースがこんなにもあるなんて、ドラ衛門もビックリだな。でもあれが持っている4次元ポケットとやらは無限ではなかっただろうか。

おっと、思考が妙な方向にずれてしまった。

林檎を袋にいれ、歩き出す。

どれくらい歩いただろうかよくわからなくなっていたころどうやら人の通るような道を見つける

「……………」。

左右を見る。どちらに進めばよいのだろうか。うーむ。と一人で考えていると何やら物音が聞こえてくるのに気づく。耳を澄ませると

……………

ドスンドスンドスンドスン

きゅー！！！！

何か巨大な生き物が走っている音に女性の悲鳴。

ふと右側を見る。

「たすけてえええええええ、ってアルスじゃん！ たすけてえ〜！！！！」

「グルアアアアアアアアア」

リサが巨大なティラノサウルスのようなものに追いかけている。軽くフメートル。訂正だ。巨大ではない。ティラノサウルスはこれくらいだったと聞く。とりあえず、この状況下は選択肢をわざわざ考えるまでもない。ティラノサウルスが走っている前を逃がっているリサの遙か前に俺は直立する。そしてさっきまでしまっていた盾を召喚する

「召喚 グレートシールド」

ジウウウウウン……という効果音とともに光がわき出て盾の形を作り出し出現する。と同時に俺の攻撃力は0になってしまふ。だがこの状況では攻撃力なんかいらないだろう。俺が攻撃力を必要とするのはソロ活動の時かパーティに攻撃役がないときくらいだ。いや、攻撃役がないパーティなんてパーティとは呼ばないか。

リサが俺とすれ違う……瞬間

「まかせろ」

「う、うん！」

そしてリサがオレを通り越してすこした場所で立ち止まり振りかえる。と、同時にティラノサウルスが走ったエネルギーを上手く利用しつつ体を半回転しながらしっぽをしならせ、俺をたたきつぶさんとはばかりに狙う

盾を構え、接する瞬間力を込める。

バアアアアアアアアアア

発生したエネルギーが周りに行場を求めて爆風となり周囲に発散する

あの威力だと普通は俺が吹っ飛ばされて砂煙が漂う中クレーターの底でぐったりしている光景を想像するだろうがそんなことは俺がこの防御力を持って否定してやる。

「グルア……………」

俺は吹き飛ばされるところかびくとも動いていない。

逆にティラノサウルスとはいうと、俺の盾にしっぽが押し返されてバランスを崩しかけている。

「今だ」

と俺はリサに今が攻撃するいい機会だと忠告する。俺が声をかけるまで固まっていたことから

「わ、わかってるよ！」

という返事は説得力がまるでない。

しゅぱんつ と地面をける音を残して瞬間的にティラノサウルスの頭部へ飛び上がり

「双剣スキル 百列斬！」

ティラノサウルスの頭上に迫ったりサの両手に持つ光に包まれた神々しい剣が空気にとける

いや、とけているわけではない。早すぎてそう見えたのだ

俺はいつも全線でボスの攻撃を受け止めているからパーティ戦でリサの戦闘はあまり目に入らないうえ、こいつと二人で戦うのはこれが初めてだった。

だからその攻撃速度に俺は驚いた。

音速よりも早く振られる剣から斬撃が繰り出され、頭部に集中的に激突していく

ザザザザザザザザザザザザザザザザザザ

体を大きくのけぞらせたティラノサウルスはバランスを崩してしまうしるにみつともなく倒れる。バツタンという表現が一番しっくりくるのではないだろうか

大きく倒れたティラノサウルスは頭部に連続攻撃を食らったうえ倒れたところにちょうど巨大な岩がありそれに後頭部を強打激したらしい。気絶している。

「ありがとうアルス！ たすかったよー！」

俺が茫然と立ち尽くしていると元気のいい声でそう叫びながら抱きついてきた

いくら俺でも中学生に飛びつれてしまつては少なからず、いやおそらくぶつとんでしまつたろう。と思つたがまつたくその考えは外れ

ることになる。飛び込んできたリサのほうで鎧に顔面をぶつけて「あいたつ！」などと言っている。このキャラってこんなに硬くて重かったっけ。

「……………」

とりあえずなんていえばいいのだろう。助けたのは礼を言われるほどのことだろうか。ていうかあの程度一人でも倒せるんじゃないか？

「え、どうしたの？」

「一人でも倒せただろう」

聞かれたから思った質問を簡潔に述べる。俺は脳内でしゃべりまくるがあまり口が上手いほうではない。リアルのほうでしゃべろうとすれば途中で噛んだりすると見苦しいのであまりしゃべらないようにしている。それを無口ととらえられるようだが別にわざわざ気にすることでもない

「いやー、あんなでつかくてこわいの一人じゃ無理だよー」

怖かった……か。たしかに俺が間に入ったことにより味方がいる安心感によって攻撃する心の余裕が生まれた、ということだろうか。なら納得がいく。でも、怖いって……

「そうか」

と、そのときティラノサウルスが立ちあがる。

めんどくさいヤツだな。とも思ったが立ちあがった直後、こちらに

背を向け、逃げていった。今日のところはこのくらいにしてやるつとでもいうような目でこつちをみていたところからまた襲ってくるかもしれない。それに、特にダメージを与えられたわけでもなさそうだ。

そんなことをしている時さつき俺がリサを発見したところから左側つまりティラノサウルスが走ってきた逆方向から人の声が聞こえてきた

「大丈夫か！ お主ら！ はやくこつちへ！」

振り向いた場所に木の影に隠れるような形でこちらをみている老人にそう促される。俺は別にいくあてもないしついて行ってもいいのだが……

とりあえずリサの反応で決めようと思う。もしかしたら怖がつてるのかもしれないし

「うん今行く！」

という俺の心配を嘲笑つかのようにあつさりと返事するリサ。だめだコイツのことはあんまりわかんない。

長居は無用。その老人の後をついていく。けもの道をかき分け、歩いた先は……村があった

「村長おかえりー！」 「おう村長そんなにあわててどうした！」

などと大人の田舎者のような格好をした人たちが駆け寄ってくる

「いやいや、ティラノーンの走る足音がした直後悲鳴を聞いてな、危ないと思ったから助けに走ったのじゃが、そこにいたのがこやつらじゃ」

「……………」

あのティラノサウルスのような爬虫類はティラノーンというのか

「どうも！」

とリサが元気よくあいさつ

この老人オレらが襲われているところから危険だと思ったようだ。

だが真実は違う。売られたケンカを買い、さらに追い返したのだ。

正直にそう話そう。と思ったが

ちよつとまで。と頭の中でもう一人の自分のような存在に言われる。

（お前、第3の“途中で会った人に道を聞く“をクリアしたじゃないか。それに村にも連れて行ってもらえたから一石二鳥 だとは考えないのか？）

なるほど、この状況もまた悪くないわけか

それにリサはあまり話を聞いていないようで気づいていない。悪口に聞こえるかもしれないがリサのあほっぽさに救われた。

「ありがとうございます」

「とりあえず宿を貸してやってあげてくれ」

「おう、わかったぜ。お前さんがたこつちにきな」

勝手に宿をとらせてもらった。なんか悪いので断ろうとしたのだが

……

「うん！ おじさんありがとう！」

という無邪気かつ幼げな要素を含む輝かしい笑顔で同意されれば誰だってその後「いや、宿はいいです」「などということなどできないだろう。俺はそこまでKYではない。

「ここだ。もう暗くなってきたから休め。」

なんとなくか、これからどうなるのは展開がよめないことに若干の不安を感じた俺だった。

俺達の初日（後書き）

誤字脱字修正しました。ミスが多くてすみません……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7753y/>

暇な世界にさようなら

2011年12月1日00時54分発行